

若松賤子の思想と

ミッション・スクールの教育

鈴木 美南子

はじめに

I. 思想形成

- a. 入学をめぐって
- b. 和漢学
- c. 教育者として

II. 思想の特質

- a. 教育的文学
- b. 婦人論・女子教育
- c. ナショナリズム
- d. 幼児教育論

むすび

はじめに

若松^{しづ}賤子（元治1——明治29, 1864——1896）の名は明治中期の女流文学者、特に翻訳作家として、樋口一葉、中島湘烟らと共に広く知られ、これに関する研究も少なくない。しかし本稿で筆者が意図するところはその作品を手がかりとして繰り返し文学者若松賤子を論ずることではなく、文学者の名のもとに、これまでいわば放置されてきた賤子の他の思想的側面をすくい上げることであり、またその文学的意義を問い直すためにも必要と思われる基礎的作業として、彼女の人間像、全体像を把握し直すことである。賤子の作品を読む者は一様に同意するであろうように、その文学活動は多分に教育的、社会改良的意識に支えられたものであったし、またフェリス女学校⁽¹⁾での7カ年の教員生活や、*The Japan Evangelist*⁽²⁾、『女学雑誌』等の誌上に展開された文学作品以外の時事評論、日本文化論、家庭改良論、婦人論、教育論などは、単に賤子の名を文学史上にとどめるだ

けでなく、彼女が教育思想、社会思想家としても興味深い人物であったことを示している。このような理由で若松賤子の「思想」に注目したいのであるが、従来親しまれてきた「若松賤子」の名は、主に文学作品を執筆する際のペンネームであるから、本稿のコンテキストからすると、本文では歴史上の一人格「かし子」の名を用いるのが妥当であろうと思われる⁽³⁾。

ところでかし子のそのような思想活動を把握しようとする時、我々は必然的に彼女の思想形成の大部分を占めたフェリス女学校にふれざるをえない。むろん幼き日を過ごした会津若松の環境や、養女として横浜に育った環境、あるいは多読家のかし子が接した様々の内外文学、また特に結婚後の思想活動には巖本善治の影響が多大であったろうことは容易に推察できるところであるが、しかし基本的には、8歳で入学してから26歳⁽⁴⁾で退職するまでの長きにわたる、フェリス女学校での生活がその中心に位置することは何人も否定しないであろう。そのような意味からかし子の思想の特質をとらえ、その教育思想史、社会思想史上の意味を明らかにすることを通して、間接的ではあるが、当時のフェリス女学校の教育、つまりミッション・スクールの一形態についても示唆するところがあれば幸いである⁽⁵⁾。なお文中、たびたびかし子の文を引用するが、その英文は筆者の手で日本語に翻訳すると、かえって英文学者としての彼女の面目をそこなうと考え、敢えてそのまま掲載した。また統一をはかるため、他の人物の英文もそのまま用いている。

I. 思想形成

a. 入学をめぐって

黒田惟信編『奥野昌綱先生略伝並歌集』には、奥野昌綱がヘボンの辞書編纂、聖書翻訳等の助手として、横浜谷戸坂下のヘボン施療所に起居するようになったころのこととして次のようなことが記されている。「先生は博士の“コック”部

屋の二階、六畳二間の一室を借りて、其処に起臥することとなった。他の一室には、後になって、博士夫人の女生徒嶋田嘉之子などを預って、之を世話したので、甚だ手狭を感じ、止むを得ず、一方の雨戸を締め、縁頬に諸道具を置かねばならなかった。此の嘉之子といへる少女は、後に巖本善治に嫁し、『小公子』の訳者若松賤子として有名である。」(p. 85)ここにヘボン夫人とあるのはミス・キダー⁽⁶⁾の記憶違いで、奥野がヘボンの助手になったのは明治4年春のことであり、キダーは既に前年の3年9月21日からヘボン夫人にかわって、同夫人が3年前から教授していた少年少女教名を引き受けて教え始めていた。かし子がここに学ぶようになったのは4年9月からである。しかも、キダーは女子が増えたところでその9月から念願の女子教育に専念しようと、男子を他の宣教師に託して女子6人のみを教えるようになったので、その一人であるかし子は、後に第一回卒業生となるだけでなく、文字通りフェリス女学校の第一回入学生でもあったわけである。ここでキダーはやっと来日の目的である女子教育を開始したわけで、当時外国伝道協会総主事J. M. フェリス(D. D.)に宛てた手紙(4年10月21日付)に、それまでの英語と聖書に加えて讃美歌が教えられるようになったと書いている。またその時の最年少生徒は8歳で本国女子の5歳位に見えると記されているので、おそらく当時8歳のかし子がその最年少生徒であったであろう。キダーはそれら女生徒はみな素晴しく頭がよいと書いている。かし子は当時横浜の織物商大川甚平の養女で、甚平の妻とりには実子がなく、かし子にはもう一人姉にあたる養女がいたようである⁽⁷⁾。かし子は、ここで物質的には何不自由なく育てられ、また養女とはいえ母親にも親切にされたが、義母が無学であったことと、もともとその賢さが気に入られて養女となったこともあり、横浜で繁盛する織物商である養父は、外国婦人にかし子を預けて英語を始めとする欧米女子の一般的教養を身につけさせたいと思ったであろう。当時のかし子の様子は、キダー(後のE. R. ミラー夫人)の記憶に拠るものか、フェリス女学校第二代校長E. S. ブースによって次のように記されている。

She was eight years of age, inclined to be indolent, and received a good

deal of pushing from the servant, who always accompanied her and studied with her. As she grew older, however, she became a better student and was a great favorite with those younger than herself.⁽⁸⁾

このようにかし子は入学当時あまりに幼く、その能力もキダーの注目をひくほどの存在ではなかったが、4年ほどたつとキダーの本国宛て書簡等にその名をあらわし（即ちその個性と才能を発揮し）はじめる。8年12月28日に伝道協会J・M・フェリスに宛てた手紙で、キダーは学校関係者の写真を紹介しながら、初めてかし子にもふれている。

...wearing a very distinct velvet collar is Kashi. She is from Yedo, speaks English well and wrote the composition about tea. I sometimes think she is a Christian. She understands much of the Bible history. She was my pupil long ago and then when her parents went to Yedo to live she went with them and returned to us when we opened the boarding school.

ここで茶に関する作文を書いたというのは、クリスマス直前に行われた試験の一環としての英作文のことで、また寄宿学校が開かれたというのは、それまで小規模な家塾形式で横浜近郊の通学生を対象として経営していたのが、東京その他遠隔地からの入学希望者が増加してきたことから、今のフェリス女学院現在地に土地を借りうけて校舎を建築し、僅かの例外を除いて全員が教員と寄宿して学ぶフェリス・セミナリーを開校し、名実共に学校教育を開始したことを指している。

（8年6月1日）かし子自身、my fourteen years of school life at a mission school と述べ⁽⁹⁾、この8年6月から22年7月の結婚退職までを自分の学校生活としているところを見ると、キダーが書いているように、かし子は4年9月に入学してからずっと続けてフェリス女学校に学んだわけではないようである。その間どれほどのブランクがあったかは、大川一家が東京に移住した時期がわかれば明らかになるが、筆者はまだ確めていない。ともあれ、上記の手紙でかし子が12歳の時すでに英語に優れ、キリスト教を受け入れつつあったこと、聖書の歴史物語に興味をもっていたことなどが知られる。その後かし子は信仰的に成長し、勉学

にも頭角をあらわしてきたようで、10年5月には横浜海岸教会でキダーの夫ミラー牧師より洗礼を受けるにいたっている。11年のキダーによる婦人伝道協会宛ての報告書には、後の植村正久夫人山内季野とともに特にその信仰的活動が記されている。

Suyeko and Kashi are earnest faithful workers for our Master. They have established a Sunday School or rather gotten permission to teach on Sunday in a private school owned and taught by a Japanese during the week. 後に述べるように季野はその頃フェリス女学校で漢文を教えながら英学を学んでいたが、一時帰省中の郷里から稲垣とよ（当時横浜海岸教会牧師稲垣信の妹、後フェリス女学校教師）に宛てた手紙にかし子の名も見え、仲良しだった彼女らの学校での様子がうかがわれる。「おまへさんと 甲子さんはおもしろいおはなしをしておあそびなさるか、またごべんきやうのときはおそろしいまじめなかほして本をよみなさるか、毎日終朝はペロペロペロと英語をはなしたりよんだり、午後はチンプンカンプン漢語偉登卓越なる高論を討論なされませう、目にみゆるよかし。」⁽¹⁰⁾

b. 和 漢 学

かし子の遺文集『忘れかたみ』の序文に、湯谷礎一郎は「君もとミッション、スクールの出なり。元来彼の校の弱点たるや、多くは和漢文趣味の稀乏なるにあり。然るに奇蹟とやいはまし、君の文、意の到る所、筆之れに随ひ、想の往く所、詞之れに適ふ。」云々と書き、以下かし子の文に日本文として最大級の賛辞を贈っている。ここで筆者があらためて指摘するまでもなく、処女作「舊き都のつと」の美文調に始まって、彼女の翻訳、創作、さらに評論のたぐいのいずれも、流麗な美しい日本文として高く評価されている。フェリス女学校が米国婦人宣教師の経営によるものであったことから、そこで長年生活を共にしつつ学んだかし子が、英語、英文学に優れていたであろうことは容易に推察できるが⁽¹¹⁾、このかし子の第一級の和漢学の教養はいったいどのようにして備えられたものであろう

か。当時フェリス女学校の生徒の中には、良家の女子のたしなみとして既に書画や和漢学の教養を身につけ、さらに英学も学ぼうとして入学する年長生徒も少くなかったが、8歳からキダー塾に預けられたかし子にそのような機会があったかどうか疑問である。むしろ先で述べるように、日本女性としても欠けるところのないオールラウンドな女性を育てたいという学校側の配慮によって、その方面の才能もフェリス女学校で開発されたと思われるのであり、かし子が和漢学に優れていたのは決して「奇蹟」とはいえないのである。

さて3年にキダーが教え始めたころは、Wilson's Reader や Webster's Spelling Book などで英語の初歩と聖書を日本語で教えることから始まったが、4年に女子だけを教えるようになってから、これに英語讃美歌教授が加わった。6年頃にはレギュラーレッスンとして History, Geography, Arithmetic, Composition, Reading, Spelling, Writing, Bible, "Peep of Day", Catechism, Singing と他に週2日裁縫、編物、刺繍などを教えるようになった⁽¹²⁾。そして8年6月いよいよ学校として開校した時点から、米国の同等の学校教育内容に準じて学科課程を整え、諸科学の他、漢文、和文学も強化することとなったのである。これによって午前は外国人教師による普通諸科学と英文学、英語学、そして午後は日本人教師によって和漢学を教授するようになったのは、先に紹介した山内季野の手紙からも読みとれるところである。当時の報告書に、

...beside the religious teaching, our pupils are instructed in simple sciences, in English, also in reading and writing their own language and Chinese. So that they are obliged to study very hard. On Saturday mornings they are taught to mend their clothing, after which, they do fancy work, having only a half holiday.⁽¹³⁾

と書かれ、またリードオルガンを教えたことも報じられている。そして午前中の授業内容は、

first lessons in philosophy, physiology, history, botany, Quackenbos' composition, reading, spelling, writing, arithmetic, geography and conversation⁽¹⁴⁾

で、すべて英語の教科書を外人教師が日本語に訳しながら教えたとある。

ところで、このように明治8年に校舎が建てられ、遠隔地の生徒も収容できる寄宿学校として、その教育内容も整備充実されるにいたったのは、いうまでもなく各地からの入学希望者の増大、即ち日本における女子教育への関心の高まりがその背景にあった。明治4年12月の「人々其家業ヲ昌ンニシ是ヲ能ク保ツ所以ノ者ハ男女ヲ論セス各其職分ヲ知ルニヨレリ今男子ノ学校ハ設アレトモ女子ノ教ハ未タ備ラス故ニ今般西洋ノ女教師ヲ雇ヒ共立ノ女学校相開キ…」という布達に基づき5年2月我国最初の官立女子教育機関である東京女学校が設立されたが、それは同年7月頒布された学制の「自今以後一般の人民華士族農工商及婦女子必ず邑に不学の戸なく家に不学の人なからしめん事を期す」との理念とその精神を同じくするものであった。このような事情を反映して女子の教育への熱意は高まり、ヘボン施療所内でのささやかな営みも次第に賑らみ、生徒数22名になったところで、5年7月横浜野毛山の神奈川県官舎に移り、前記のように教育内容もかなりしっかりしたものになった。当時はまだ切支丹禁制下にもかかわらず、気骨の人である当時の県知事大江卓が一外国婦人宣教師に高級役人の住む一等地の官舎を提供し、これを人力車で送り迎えして、ある期間伝道協会に全く財政的負担をかける必要がなかったということも、そのころ女子教育の必要が次第に認められつつあった事情の一端を示すものである。6年7月にはリフォームド教会宣教師フルベッキと前記外国伝道協会総主事J. M. フェリスの斡旋で同教会附属のラトガーズ大学教授であったデヴィッド・モルレーが文部省の学監として招聘され、女子教育に関する意見書を提出、それに従って7年3月寄宿制の東京女子師範学校が設置された。このように政府もやっと女子教育に重い腰をあげるにいたって、フェリス女学校もそれに応じた進展が要求されたのであった。即ち、英語をはじめとする初歩的教育であったのが、学制のしかれる段階から一般普通の初等教育が要求されるようになり、また8年には東京女学校が教則改正によって中等教育機関に脱皮し、女子師範学校も設けられ、他のミッション・スクールも追々設立される中で、フェリス女学校も中等の教育を施すことが求められるにいたったの

である。校名をフェリス・セミナリーとして出発したことは後に述べるように米国の一般的な女学校、セミナリーと同等の教育レベルであることを公言したものであった⁽¹⁵⁾。またそこには教育レベルだけの問題でなく、あわせて内容においても、伝道的な意図の優先した外国宣教師による家塾的教育から、正規の学校として真の日本人教育をねらい、日本の学校として定着発展させようという学校側の教育的姿勢の展開があったことも注目しなければならない。後にかし子が教員となった時、ブース校長の依頼で婦人伝道協会に学校の概況を書き送ったが、その手紙の中で

Mrs. Miller had early in her work the patronage of several Yokohama authorities; the expenses of the school were for a time paid to some extent by them, and it was through their influence that the present beautiful site was obtained for the building. It has been the aim of the teachers to afford the pupils the advantage of good Japanese education, as well as to give them a thorough knowledge of the English language, so that a native school had to be organized as well as the English.⁽¹⁶⁾

と書いて、新設されたフェリス女学校が日本人の力によるところも大きかったこと、それが日本人のための日本人の学校であることを強調している。

前置きが長くなったが、この8年の時点からフェリス女学校ではそのような事情を反映して和漢学も重視するようになったのである。当時の生徒岡田こうの思い出によると「学校が今の山手に移りましてから、ただ横文字の学問ばかりさせて、肝腎の日本のことを学ばせなくては、折角、教育はしてもそれでは片輪ものになって了ふといふので、習字は申すまでもなく、尚ほその外に日本外史や、皇朝史略や、貞女鏡などをも教へられました」⁽¹⁷⁾とある。またキダーの当時の報告によると新しい教育を求めて入学してくる女子とはいえ、彼女らがその家庭で生活できなくなるように教育するのは親切ではないというので、幾分の改良を試みながら日本の諸習慣などはできるだけ保存するよう配慮したという。

To so teach them, that they would be dissatisfied with, and discontented

in their own homes, would be no kindness. So they have been encouraged to retain their own pretty native costume, and some of their distinctive daily customs, while also they have learned some of our refinements of behavior.⁽¹⁸⁾

従って新校舎での生活は外観、構造は西洋式であったが、内部は畳敷きで寝具、衣服、食物、坐臥、動作等にいたるまで一切日本式であった⁽¹⁹⁾。また同報告によれば、開校の年、夏休みの後9月15日から学校を再開してみると、前の日本人教師がやめてしまったので、新しく人をたのんだとあり、かつて a sort of Shintō priestess であった一人の remarkable woman のことが書かれている。彼女は奥野昌綱の20年来の知合いで、非常に学問があり彼女の指導によって生徒たちは漢文と和文に偉大な進歩をなしたと記している。この和漢学に堪能な婦人の名前はこれまで不明であったが、『植村正久夫人季野がことども』に書かれている小原燕子がこの人ではないかと思われる。同書によれば季野が入学したころの日本人教員として「小原えん子」の名があり、その説明として、中島湘烟、福田英子と共にうたわれた後の女流政談演説家の一人とあるが、国文学史上名のある小原燕子は国学に秀で、神道の教導職、中講義の地位にもあった女流国学者であるから、むしろキダーの記述と一致するのである⁽²⁰⁾。当時のミッション・スクールがこのような人物を雇ったことも興味深いが、このことは何よりフェリス女学校が当初から優れた和漢学の教員に恵まれたことを示すものである。8年12月28日付フェリス宛書簡でキダーは学校関係者の写真を説明しながら、奥野と並んで写っているこの婦人について詳しく書いている⁽²¹⁾。また6年以降仕事の合間に同校を手伝っていたミラー牧師が、開校した年のしめくくりとして9年6月23日に行われた最初の日本人教師による試験について報告している。ミラーはかの日本人教師が彼女自身のやり方ですべてこれを取り行ったと書き、一言もこれを理解できない参観者も大変興味深く思ったと記している。その様子は詳しく綴られ、小原燕子であろうこの婦人教師は参観者の大勢見守る中で、極めて莊重かつ厳かに試験を取り行っただようである。その教師は助手（おそらく山内季野）を従え、生徒

達は助手に一人一人名前を呼ばれて、和文と漢文で書かれた歴史書を年少生徒はこれを読み、年長者はこれに説明も加えることが要求された。また周囲の壁には楷書や草書など様々の書体の習字が掲げられ、年長生徒の場合、それらは各自が創作した頌詩やソネットの類であったという⁽²²⁾。

この教師は二年足らずでやめ、その後山内季野が数ヶ月間和漢学の主任教授となった。季野は父祖代々神官の家の出で、土地の豪家であったから家に文人墨客の出入りが多く早くから国学に親しみ、また和歌山の漢学塾で教師の家に寄宿しながら男子と一緒に漢学を修めたので、故郷では若くして書画漢詩漢文方面の名が高かったが、なお新しい学問をもとめて横浜に出で、フェリス女学校で漢学を教えつつ、また年長生徒の一人として普通学、英語学を学んでいた。しかし季野の希望もあって和漢学の主任教授には年輩者を迎えることになり、一年間ほどミラー師の日本語教師であった小原秀彦が10年10月からその任に当たることになって、季野は助教員にとどまったのである⁽²³⁾。キダーは小原を高く評価し、学校との関係が長く続くよう希望している。

Mr. Ohara who has been Mr. Miller's teacher for about a year became a regular teacher in the afternoon Japanese school last October. ...We esteem him highly and hope we may long retain him in connection with our school. ...Before Mr. Ohara became a teacher in school for some months, Suye Yamanoichi one of the older pupils had been the principal teacher, but it seemed better to make her an assistant and to have an older person for the head. Indeed Suye desired such an arrangement herself.⁽²⁴⁾

このように明治8年の開校時からフェリス女学校は和漢学にも意識的に力を入れたから、かし子も12歳から15年に19歳で卒業するまでに、その方面の一通りの素養は身につけることができたと思う。学校が与えるものの他、彼女のこの種の才能を遺憾なくのばしえたのは、課外で彼女が好んで読んだ膨大な読書量の賜物であったことはいうまでもない。こうして卒業後はかし子自ら母校で和文学を教えるようになり、他に小原秀彦が和文学、聖堂出の熊野與（『馬可講義』『格物探源』

『約翰第一、二、三書、猶太書註解』などの和訳あり）が和漢学、林蔭（日本禁酒会の創立者）が書画、そして21年からかし子とは終生親しい間柄にあった中島湘烟が漢文の教師として3カ年教壇に立ち、また一時教頭の地位にもあった。これらがその後の和漢学担当者の顔ぶれであるが、実際どのような内容が教えられていたかは、明治17年と20年の学校規定に詳しいカリキュラム、時間数や教科書などが明記されているので、今日でも正確に把握することができる。それらは非常に高度な充実した内容のものとして興味深いが、これはかし子の教師時代のもので、彼女の和漢学教養の形成とは直接関係がないので省略することにする。ただここで指摘しておきたいのは、ミッション・スクールとはいえフェリス女学校が、かし子の後にも和漢学教員を次々に自家生産できるだけの内容を備えていたということである。

c. 教育者として

さてキダーは12年春から休暇で帰米し14年春に再び来日するが、その後は専ら伝道活動に従事するようになり、かし子は大切な師を失うことになる。キダーは無論その後も学校を気かけ生徒を愛して、月に一度は東京に散っている卒業生を迎えて茶話会を開いていたので⁽²⁵⁾、かし子も築地に住むキダーとは時に会い、また手紙を書いていた。しかしかし子は母とも思うキダーのいない、ミス・ウィットベック管理下の学校に失望しつつあり、14年の夏休みをキダーと共に過ごした時、そのまま学校をやめる気持ちになっていたようである。しかしキダーから強くもどるようさとされ、しっかりした精神の持主であるかし子は、自分になしうる善を行うべきであるとの責任感によって学校にもどっていったとキダーは伝えている⁽²⁶⁾。このような心理状態は恩師を失い学校に失望しつつあっただけでなく、長年学校に学びながら18歳になってまだ将来の方針の定まらない不安でもあったであろう。当時、女子教育はスタートを切ったばかりで女教員として自立する道もまだ開拓されていなかったし、そうした社会状況の中で、宣教師たちも主に信仰と新しい教養を身につけた家庭婦人の育成を主眼としていたから⁽²⁷⁾、実際フ

フェリス女学校に学んだ生徒たちも多くは結婚して伝道者らの妻になるケースが多かった。しかし14年12月ユージン・S・ブースが校長として来任するにいたってかし子は水を得た魚のように生き返り、同夫妻に愛され、信頼されまた頼りにもされるようになるのである。ブースによって学事規則も初めて正確に明文化され、かし子は15年6月高度の試験に合格して、29日フェリス女学校の唯一人の第一回卒業生となった⁽²⁸⁾。卒業式は閉校式として大勢の客を招いて盛大に行われたが、それは後の卒業式もそうであるように、生徒たちによって論文朗読など、それまでの学習結果が次々と披露されるものであった。またフルベッキや稲垣信らの女子教育の発展に関する演説も行われた。この時のことは英文集『巖本嘉志子』⁽²⁹⁾に収録された15年10月、フェリス・セミナリーから出されたかし子の手紙に書かれているが、これは内容からみて恩師キダーに宛てられた手紙と思われる。しかし、そこには卒業とはいえ、かし子の特別の感慨は語られておらず、相変らず一学徒として淡々と自分達の新学期の前進が期されている。それは規定ができたことに伴う自分の卒業を特に大きなできごととは考えなかったからかもしれない。そのことよりむしろ、かし子はその夏健康が勝れず、ブースの好意でその一家と函館に避暑に行き、途中、船の難破、漂流生活という思わぬ経験をした一部始終を詳しく書き記している。そして最後に新学期からの生徒数はほぼ40名であること、かし子が正教員として日本語の下級クラスを受持つことになったことと、その喜びを語り、学校の他に家のない自分がいかにこれを愛しその役に立ちたいと願っているかを切切と記している。

Mr. Booth has given me charge of the lower classes, in the Japanese regular course, and I highly enjoy my new employment. You see I know of no other "home" beside this school, this is to me the only dear spot on Earth and I dread to think of the time when I shall have to leave it. May the Lord help me to perform my duty faithfully, and to do some good, however little it may be, while I am here.⁽³⁰⁾

このような事情から、かし子が教師になった後いかに熱意をもってその務めを全

うしようとしたか容易に推察がつく。かし子はまもなく和文学の他に英語も教えるようになり、また家政関係も担当するようになった。明治20年の「布恵利須英和女学校一覧」には、教頭の高根虎松、和漢学の熊野興、和文学の小原秀彦らの次に生理学、健全学、家事経済、和文章、英文訳解は島田嘉志子とあり、彼女が学内でいかに重んぜられる存在であったか知ることができる。当時の *The Mission Gleaner* には、かし子が16年6月、ブースの依頼でフェリスの概況を書き送った手紙や、17年校舎が改築拡張された際の落成式（4月）におけるかし子の活躍ぶりをブース夫人が書き送った手紙、またその式当日のかし子の英語演説などが掲載されている。はじめのかし子自身の手紙や、落成式での演説には、ミッション・スクールの教師の自覚のもとに、後でかし子が *The Japan Evangelist* や『女学雑誌』等の誌上で展開する婦人論、女子教育論と同質のものがすでに顔を出している。手紙については先に一部紹介したが、フェリス女学校の設立に際し日本人の力も預って大きかったこと、それが日本人のための日本の学校であることを強調するほか、日本における中産階級以上にみられる女子教育の関心の高まりを喜びながら、日本婦人の知性の発展せられる機会が一層多く与えられることを願い、またそのような婦人の自立と発展が、本質的にはキリストによる救いによって真に人格として立たせられることでなければならないと考えている。演説の内容については後に婦人論を述べる時に紹介したいと思うが、ブース夫人の手紙もまた教員としてのかし子を知る上でなかなか興味深い。ブース校長は落成式に際してその一切の仕事と責任を日本人教師たちと年長生徒たちに任せようとしたが、いままで宣教師に指導されることに慣れてきた彼らは非常に驚きまた躊躇したという。しかしかし子の決断によって事態は変った。

But after helplessly looking at each other awhile, the consciousness of the fact that two hundred and fifty invitations had been sent, some to very influential Japanese, roused OKashi San to action. Through her the rest finally waked up, and all set to work with a will. (31)

このようにリーダーとなって一大奮闘をしたおカシさんは心身共に疲労してその

後数日間休まねばならなかったと書いている。この日本人教師達による式典運営の意義をブース夫人は次のように記している。

The Japanese teachers are very proud of their success, and I believe the whole native church feel more as if this was their school and they had some interest in it, simply because we stayed in the back ground and gave them the responsibility.⁽³²⁾

ブースが来任してから、それまで宣教師主導型であった学校経営は、むしろ日本人に責任を委ねてゆく方針に切り換えられていったが⁽³³⁾、そこで年輩の男子教師も措いてこの指導的責任を担っていったのが20歳そこそこのかし子であった。かし子自身フェリス女学校が真に日本人による学校として確立することを願っていたし⁽³⁴⁾、なにより長年「恩庇」をうけた者としての「負債」と母校への深い愛情が、彼女をその仕事に高い理想と希望をもって献身させたのである。彼女の学校に対する熱意と献身の深さについてブースは次のように述べ、事実彼女の寄与する所は非常に大きく、学校の方針さえ彼女のパーソナリティの影響をうけたといっている。

Her *alma mater*, which she so long faithfully served and to whose welfare she devoted all her energies, owes her a debt of gratitude which can only be discharged by its constant endeavor to realize the high ideals and hopes which were ever entertained by her, who was its first graduate. Its popularity, efficiency and aims were all more or less influenced by her personality. The self-devotion she bestowed upon the cause she espoused was generous and whole-hearted.⁽³⁵⁾

このような母校発展への熱意が、また学校を離れた後も広く日本婦人の社会的地位の向上、キリスト教女子教育に力を注がせる動因に転化していったことはいうまでもない。

ところでかし子がフェリス女学校在職中、生徒達に文学を奨励し、18年10月時習会⁽³⁶⁾と名づける文学会を起こしたことは広く知られている。佐藤哲子（山本

秀煌の従妹、のち母校教員)は思い出の中で次のように語っている。「文学を奨励されたのは島田かし子女史で、明治18,9年の頃から時習会と云ふものを生徒間に起し、月に一回開催して、各級の生徒の中より其学力に応じて文章を作り此会で朗読しました。未だ西校舎の建たない頃の事でありましたが⁽³⁷⁾、同女史の卒先で時習会を公開して、外より客を招聘して文章朗読、英詩読誦、演説、音楽、会話などをいたしました。」⁽³⁸⁾ 時習会(文学会)の記事は度々『女学雑誌』に掲載され、特に評判の高かったものについて詳しい内容と批評まで載せられているので、今日でもその概容を把握することができる。ところでかし子がこの文学会に何を期待していたか、どのような指導方針をもって臨んだかは、次の資料を通じて知ることができる。『女学雑誌』19年1月25日号にフェリス女学校から送られた時習会雑誌1号の序文が掲げられ⁽³⁹⁾、発行の趣旨、会の姿勢などが書かれているが、おそらくこの序文は会頭かし子の手になるものであろう。また21年11月2日の文学会3周年記念会でのかし子の英文挨拶が『女学雑誌』23年12月6日号の附録に収録されている。時習会雑誌1号の序文といい、この記念会挨拶といい、そこには彼女の学問、教育への姿勢、とりわけ女子にこのような訓練を施すことの意味が明確に語られているのである。文学会とはいえ、その内容は今日でいう所謂文学に限定されたものではなく、学校で学ぶこと、知的活動のすべてが対象となるところの、かし子によれば intellectual assimilation と literary training をねらいとする学会であった。

まず“時習”とは孔子の『論語』「学而編」における「学而時習之不亦説乎」からとったもので、常に学ぶの意であるが、敢えて古聖の言葉によったのは、旧きが故に軽んじず時に応じて思い起こし新しい糧となそうという会の姿勢を反映していた。序文は次のようにいう。「本誌を発行し之に名くるに時習の文字を以てせり蓋し之を魯論学而の語に取れり……今雑誌に名くるに孔子の語を用ゆと彼等は日進開明の今日に処するに千載の古株を守らんとするか恐らくは人をして活潑の氣象を喪はしむる事なからん乎と嗚呼これ何の言ぞや世上の事物を考察すれば優勝劣敗の理を免る事能はず古の今に及ばざる事素より多し然りと雖ども萬

事萬物悉く変遷古今同一なるものなしとおもふに至りては誤りならずや論者も其一ならんか俄に之を見れば変遷したるがごとくなれども其实変らざるものあり…孔子は人なり然れど彼の発見したる真理も彼とともに陳腐なりといふは我らの取らざる所なり我ら教育を受るものにして時習の功なくんば決して成業を期す可らず我らは孔子の問学に時習の功を用ゆべき事をいひしを深く感じ他日の成業を期してかく名くるなり」。また記念会挨拶でも、かし子は次のようにいっている。

The rather antiquated origin of the term, "時習", may suggest to you one of our principles; our desire to form a habit of not slighting anything because it is old, and to keep fresh whatever has value in the saying of that venerable sage 孔夫子 to whom our country owes so much. The Chinese teacher in the wellknown passage from which the two words are taken comments on the pleasure of acquiring knowledge, and then reviewing or dwelling upon it from time to time.

かし子のこのような議論は旧きものでも価値あるものは積極的にこれを保存しようという意識に裏打ちされたものであるが、しかし一方彼女は旧き弊害はこれを決然と拒否しうる優れた合理性も同時に備えていた。かし子は伝統的婦徳の頑強さについて次のようにいっている。

We are not far removed from the time when needle and distaff were the insignia of womanly occupation. Indeed the idea is so deep-rooted among us that the most enlightened seem loathe to part with the old idea that womanly virtue requires her to do her "own work."

そのような根強い社会的因襲の中にあっても、need と capability のある者は、女性たりとも仕事をもつべきであるとかし子は考える。一時代の道徳は決して普遍的ではありえないのである。

In the world's progress it not seldom happens that the virtue of one age becomes the mistake of the next.

特に教育を受けた女性はその特権を一身の益としないで、公益に参加し、社会、

特に知的分野に働きかける責任があるという。

The intelligent part of the world is haranguing us on our capabilities, and we must neither live beneath our privileges nor withhold our best for the cause of the general good.

そこで文学活動、知的労働こそ、そのための有力な手段であり聖なる務めであった。

What a powerful weapon may the pen become in the hand of a noble woman! With what influence to elevate and purify society can she wield it!……Happy is she who finds in this splendid field her speciality, for she may make it a noble and holy calling.

このように、フェリス女学校文学会会頭としてのかし子の所説をみると、そこには教職について数年を経過したかし子の教育者としての信念と、特に文学者としての成長、文学観の確立と、その自信のほどがうかがわれるのである。かし子がこのように有能で進取の気性に富んだ熱心な教師があったというだけでなく、若い生徒たちを心から愛し、また生徒に慕われる教師でもあったことは、先のブースのスケッチの中で、日曜日の午後やな夜どかし子が生徒たちに、自分が本で読んだ神の人間に対する愛についての“Old, old story”や、気高い献身的な婦人の生涯などを語ってきかせ、また生徒が就寝するまで一緒に歌をうたったと記されていること、またかし子自身が『女学雑誌』や *The Japan Evangelist* 誌上で、教師時代に接した印象深い生徒の思い出などを親愛をこめて書いていることなどからうかがわれる。

以上、教員時代のかし子を見ることによってフェリス女学校で学んだものがかし子らしい展開をみせはじめの様子をかいまみてきたわけであるが、そこに成長しつつあった個性と才能の若木は、巖本善治という、女子教育への関心においても、文学、宗教への熱意においても、かし子にとってまたとない好配偶者をえることにより、その理解と援助によって一段と成長し豊かな実を結ぶようになるのである。かし子は1年以上かかって行われたフェリス女学校の大規模な拡張工事

の完成をみとどけ、22年6月1日の献堂式で Yesterday and tomorrow の演説を行なってから、予て仕事上の交際のあった『女学雑誌』の編集者で明治女学校の教頭である巖本善治と、7月18日⁽⁴⁰⁾ 横浜海岸教会でブース司式、中島信行、俊子（湘烟）夫妻を証人として結婚式をあげ、学校を去っていった。夫善治も幼い時に母を失い、両親の愛情を知らずに成長したので、かし子は初めてえたこの家庭をかけがえなく大切なものと思い、幸福な結婚生活と3人の子供にも恵まれ彼女の天来の素質は一段とみがきがかけられて、次々と作品が生み出されていった。そしてかし子にしても結婚してやっと人生の意味や人情というものがわかり始めたところであったが⁽⁴¹⁾、もともと蒲柳の質で結婚の前年に咯血したような状態であったから、もっぱら自宅で静養しながら時々筆をとるような生活を続けた後、結婚してわずか7年たらず33歳で不帰の人となったのである。従ってその文学的作品にしても、社会的活動にしても、真に開花しないうちに失われてしまったといってよいであろう。しかし短い活躍期間ではあったが、彼女の残した足跡がやはり歴史上不朽のものであることには変りなく、以下その書き残したものを通じて、その思想の歴史的意義といくつかの特質を整理してみたい。それは最初にことわったように従来主になされてきた彼女の文学的評価の問題ではなく、きわめて教育的社会改良的啓蒙的といえるその姿勢に注目してとらえなおしたものである。

II. 思想の特質

a. 教育的文学

文学にはふれないといい、またかし子の文学が教化的性格のものであることは従来指摘されてきたところなので⁽⁴²⁾、特に詳しく論ずるつもりはないが、彼女の思想の特質を浮きぼりにする限りで最少限の紹介をしたい。かし子が結婚後、様々な弊害をもった日本の家庭の改善を考え、日常的な家政のことから、特に主

婦たり妻たり母たる婦人の教育、心構えを重視し、また親子関係、幼児教育、しつけに言及し、とりわけその文学的才能を発揮して、従来看過されてきた健全な少年少女文学、家庭小説の分野に意識的に力を注いだことは周知のことである⁽⁴³⁾。そしてそれらの作品の多くがキリスト教的な愛を基底としたものであることも指摘されてきた。かし子の作品を一つ一つあげて説明するまでもなく、その教育的性格については、かし子自身が文学を書く自分のねらいを明解に述べている部分があるのでこれを紹介してみたい。かし子は『女学雑誌』記者から、女流作家の一人とみなされ、女性として小説を書くにいたった動機やどのような小説を良しとするかなどを問われ次のように答えている。まずそこに認められるのは、かつてフェリス女学校の文学会を主宰した時から抱き続けてきた思想、即ち、女性でも文学が好きでその心得があればこれに従事してさしつかえないと思うだけでなく、婦人には教育、矯風の責任があり、文学という方法を用いて正義、高潔の実現に寄与することができるというものである。「女流にして苟も文学の嗜好と心得あらんものは、小説文学に従事して苦からぬ事と思ふ已ならず、凡そ婦人たるものに教育、矯風の事業の責任ありとせば、一般小説文学の嗜好に投じて正義、高潔などの世に勝利を得る補助を為すことは、婦人等の多少為し得る処と確信して居り升、それ故聊か教育の事に志ある自身も多少己の学び得たる処と悟り得たる処を理想的に小説に編んで妹とも見る若手の女子たちに幾分の利益を与へ、社会の空気の掃除に聊かの手伝いが出来れば何よりの幸福と考へて居り升た。」⁽⁴⁴⁾ このように考えるかし子にとって、小説は子供のおもちゃにも似て、社会の教育矯風上有効な手段であると同時にまたそうでなければならなかった。「小説を一ツのミーンズとしての価値は、先手近な例をとれば、子供の遊ぶおもちゃに似て居ると思升、……おもちゃは子供の教育に大した関係のあるもの、作り様、用ゐ様によっては、書物や教師の及ない効用をすると仰やれば、小説も矢張り矯風上、教育上に同様の関係を有って居って、間接には学校や論説や説教などのとどこかぬ処に其感化力が預って力が有ると思ひ升。そうして二ツとも其需要のある間は、其物自身に価値のあるないに係わらず、是に応じながらなる丈これを利用して、

社会の進歩を補助せねばなりません。』⁽⁴⁵⁾ だから小説はみな須らく教育的矯風の配慮のもとに書かれた健全なものでなければならない。「然らば近いたとへに彼の絵草紙屋に近頃風俗を乱す物なりとて警視庁より禁止された様なものが、亦小説の中にあってはなり升まい、よしまた見憎いものを絵に書く必要の有った時は、なる可く是を憎み嫌わざる様に書かねばならぬ通り、普ねく人事を写し出す社会の絵又写真の如き小説に、悪人悪行を描き出す時分には、これを善人善行に対して其性質品位を判別し得る已ならず、一方を敬慕すると共に又一方を嫌悪させる様に注意して書事は、小説家の本分と存じます。苟も小説家にして、少くとも此心得がない時は、実に徒らに文学を弄ぶのであって、道に志す人の共に語るに足らぬ族と存升、若し又小説文学が徒らに人情を描き出すに止る者ならば、私共は自ら許して斯くの如きことに練練を得ることを一つの目的として、追求むる事を屑とせぬはずでご座り升、併し今の世には人の命を奪ふ利益が人の命を救ふ器と一成て居る通に、少壮の志を養ひ、社会の空気を清める小説よりは、寧ろ少壮の操を破り社会の空気を毒し、其元気を吸とるものの方が、遙か多いのは、如何にも歎く可きことと存じて居り升。』⁽⁴⁶⁾ ここには当然様々の反論が予想されるし、あまりも素朴に過ぎる文学論とも思えるが、敢えてそういわざるをえなかったところにかし子の思想があり、その意味ではまことに明解で決然たる態度表明であり、また現社会と当世文学への勇氣ある挑戦であったといえる。彼女の作品が「教化文学」ととどまるが故に、それだけ「文学的」価値が低いと判断するとすれば、それは一つの文学観に固執した立場にすぎない。かし子は人生、社会の教育矯風上の必要がある限り、作品自身の価値があるないにかかわらず、これを利用して社会進歩の助けとしなければならないと述べているが、彼女のその謙虚さはをるかに越えて、かし子が短い期間に残したいいくつかの作品は、充分「文学的」にも価値の高いものであったというべきではないだろうか。その作品の特質は教育的とはいえ所謂説教的なものではなく、一つの読物として読者を楽しませながら知らず知らずのうちに心を清め愛の尊さを教えるものであったが、以下、柳田泉の言葉を借りて、筆者のいわんとするところにかえたい。氏によればかし子の

作品には「巧まない教訓がある」がそれは「ひろい愛の教へを本質としたもの」であって、「清い愛の教へによって、醜惡にみちみちた人の世をいくらかでも神の世界に近づけたいといふ、そこに若松女史の文学理想があったのであり、また女史の文学の感化力といふものがあった」という。「明治以後の文学で、事実女史の文学ほど清純な愛の教へを説いた文学は少なからう。心を清くする話といふものは、全くかういふ文学ものをこそいふのであらうと思ふ。」氏は『小公子』を中学時代感激をもって読み、その愛読書の一つであったというが、そこから「何よりも精神的に大きな慰めと感化をうけた」「此の本の主人公セトリック少年のことから大きな愛の力がいかに人を善くするものかといふことを考へて、いつも自分の周囲に何かしら現実の輝やかしいものを感じた」「わたしの生涯は、この本を知ったことによつて、たしかに若干善いものになれたと思ふ。……文学が皆こんなものでなければならぬなどとは考へなかつたが、然し文学にはこんなものもあつていい。こんな作品に何かしらほんたうの文学の力といふものがあるのだ。人の心をよくする、生活をよくする。それが文学としての尊い役割だといふやうなことを考へさせられたものである。」このようにかし子の文学活動は「ひろい意味の人生教育といふことを考へてなされ」たものであり、「明治の文学に清純な愛の感化の痕を深くとどめた」⁽⁴⁷⁾ といっている。なおつけ加えるなら氏は同じころ愛読していた蘆花の『思出の記』からも同様のことを感じさせられたといい、また、かし子は主として日本の女性の幸福を考えて書いたが、結果的に、この文学的感化はむしろ男性の側に多かったのではないか、『忘れがたみ』の藤村の序を見てもそう思われると書いているのもまた面白い。ちなみに明治期のかの偉大な仏教者清沢満之も「信ずるは力なり」と語って『小公子』にもふれている⁽⁴⁸⁾。これがかし子の作品の一つの主要なモチーフであったことはいうまでもない。

b. 婦人論、女子教育

かし子は慈善、矯風、幼少年教育に関心をもち、これらについて発言する機会も少なくなかったが、特に女子教育、婦人問題がかし子の生涯の重要関心事であ

ったことは彼女の経歴から充分察しうることである。一口に日本婦人の社会的地位の向上といっても、その議論は必ずしも他の女権論者と同じではなく、またそれが当時のフェリス女学校の教育を強く反映している点にも注目しなければならない。先にふれた17年4月のフェリス女学校改築記念式典において当時教師であったかし子によって行なわれた演説は、彼女の最初のまとまった婦人論、女子教育論であり、その後の議論も基本的にはこの範囲を出るものでないことから、以下においてまずこれを紹介してみたい⁽⁴⁹⁾。かし子は今日の時代を特色づけるのは、人類の世界的な知的道徳的進歩であり、その中で男子も女子も人間としての真の地位と尊厳を求めるようになったという。

That which distinguishes the present from the past ages, is the world-wide intellectual and moral development of mankind. Its noblest efforts have been to direct men and women to seek their true position and dignity.

ところで日本の場合、近来の激動の中で、

the external forms of civilization were readily imitated. But the true essence or spirit of civilization can neither be adopted nor imitated.

という現状であるが最近やっと教育を要求するゴウゴウたる声が起こってきた。そこで男女の人格としての平等を認めるかし子は、女子にも男子と同様の教育を要求するのであるが、その立論の根拠は極めて現実的であり改良主義的である。即ち男子は国をリードする者として当然広い教養と、そして可能ならば正義の何たるかを教える必要があるが、女子にもまた最高の教育が与えられなければならないのは、彼女らが将来を担う男子の妻たり母たる者だからである。家庭はかし子において女性がこれを通じて社会の諸悪の改善に参加してゆくことのできる重要な媒体であった。

Does not the fact that they are to be the future wives and mothers of *men* entitle them to the best culture Japan's young civilization can afford? Will not homes over which they must preside be efficient in regenerating society and ridding the country of existing flagrant vices?

このようにかし子は女子を基本的に家庭に入るものと考えているが、それは女子を男子に従属的なものと考えたのではなく、あくまで対等な人格関係に立った仕事の分業であって、また儒教的な伝統社会からやっとぬけ出しつつある当時の状況を考えあわせる時、それは単純に退嬰的とはいえない議論であった。彼女は男子の companion としての女子の対等な人格性と権利を次のように高らかに主張する。

Have they not been long enough wronged, denied their rights and deprived of their true place beside the men as their worthy and honorable companions?

かし子におけるそのような因襲を越えた女性の人格的尊厳の把握は、根本的にはキリスト教信仰によって確立されたものであることはここで多言を要しない。島崎藤村の「桜の実の熟する時」によれば、『嘉代さん』と主人が細君を呼ぶにも友達のように親げなのは、基督教徒風の家の内部の光景らしい」とあり、夫善治がかし子を「嘉志さん」と呼んだことがわかるが、かし子の婦人論はまた善治の「自由主義的、個人主義的な良妻賢母主義」⁽⁵⁰⁾と軌を一にするものであった。

さてこのような日本婦人の社会的地位向上への熱意が、ミッション・スクールのキリスト教教育に端を発するものであったとすれば、またかし子の論調を特色づける一種の保守性もまたフェリス女学校の教育の中で獲得されたものであった。前にも述べたように、フェリス女学校は創立当初から新しい教養とキリスト教信仰をもった家庭婦人の養成を主眼としていたし、明治14年末ブースが校長に就任したころから、女子教育を求める声の高まりとともに、ようやく女教員への道が意識されるようになってきた。ところで婦人宣教師たちによって創立されたミッション・スクールは、彼女らの母国アメリカにおいて19世紀に広く発展した Female Seminary の日本版ではないかという研究がある。⁽⁵¹⁾ 即ちアメリカでは18世紀末から婦人の教育的要求の拡大によって Female Seminary という女子中等教育機関の設立運動が開始され、それは19世紀になって急激な進展を示した。その教育目標は「人生に対する準備」であり、中産階級の女子にリベラル・エデュ

ケーションを施すものであった。そしてその教育の中でも特に重視されたのが、宗教及び道德教育、次いで家政教育、教職課程、その他の知的情操的訓練であり、「母としての影響」と「社会的有用性」が常に強調されたという。このようにフィーメール・セミナリーはキリスト教的信仰をもった教養高い家庭婦人、及び宗教的教育的情熱をもった女教師を養成し、以て家庭及び社会の教化向上に役立てようというものであった。また婦人宣教師の養成にも心がけ、フィーメール・セミナリーの先駆である Mount Holyoke Female Seminary (のちカレッジ) は創立後 100 年間の卒業生総数 16,620 名のうち 386 名が外国伝道に赴いたという。フィーメール・セミナリー設立運動は 19 世紀後半以降、東北部から中西部、南部のフロンティアに広がり、さらに卒業生の宣教師らによって、アジア、中近東、アフリカにまで移植されていった。だから我国のミッション・スクールも又、それらセミナリーの卒業生によるか、またはこれを範として設立されたものも少なかつたであろうと考えられるのである。事実リフォームド教会系のミッション・スクールだけみても、セミナリーの名のつくのはフェリス・セミナリーだけでなく、梅光女学院ももと Sturges Seminary といわれたし、インドにも Chittoor Female Seminary というのがつくられている。フェリス女学校の創立者キダーが明らかにフィーメール・セミナリーに準じた学校にしようとしたという確固たる根拠はないが、キダーの教育方針やその後の教育内容をみる時、その密接な関連を認めざるをえない。明治 17 年の学校規定では「家は邦国の本なり、苟くも家にして斉はずば邦国の化育を望む可らず。女教は斉家の由て起る所なり。苟くも女教にして作るなくんば斉家の美果を期す可らず」と女子教育の趣旨を述べているが、増築後の 22 年 10 月 19 日号『女学雑誌』に出した折込広告によると「本校の目的」として簡潔に「本校の教育は及ぶべき丈け時勢の必要に応じて実用の教育を施し、先づ女性固有の諸能力を平均に發育することを主旨とし、学力は普通学及び英和両学を充分に教習せしめて専ら会話筆記に精確流通ならしめ、又た将来女教師となるの資格を具備せしめ、且つ一家の庭訓経済より外が交際上の義務に至るまでを教授し、特に基督教によりて風儀道德品格を上達せしむるにあり」と

あり、かなりレベルの高い一般教育、専門的な教育の他、書画、音楽（ピアノ、オルガン、バイオリン、琴など）はもちろん、家事経済、西洋割烹、食卓礼式、裁縫、女礼などがあり、女礼式として、日本婦人としての行儀作法、茶、生花等も教えている。

話はもどって、かし子の婦人論、女子教育論はその後いっそうの冴えをみせてくる。しかしかし子はその活潑な文筆活動において正面切った婦人解放論を意図したことは少なく、日本婦人の地位改良への強い熱意をむしろ様々なオブラートに包んで、間接的に表現していったといっている。例えば創作や翻訳の中で、さりげなくその願う所の女性像を示唆するのもその一つであった。かし子はディッケンズの「デヴィッド・カパフィールド」の一部を訳した「雛嫁」の小序で「玩弄にあらぬ終生の同伴者は、品性上の発達が同様でなければならぬと共に、主たる夫の事業の上に、真の内助者でなければならぬ、此要点に於て釣合ふと否ととは、幸不幸の源となると云ふ理」を示そうとしたといっている。また『女学雑誌』上で家庭論を論じて主婦の心得、夫婦関係、妻として、母としての心構えなど日常の具体的実践的な改善に着目し、また *The Japan Evangelist* 誌上では日本史の中の優れた女性や、信仰、教育、社会事業の面で現在活躍する婦人たちを紹介し、また折々の新聞雑誌に出る婦人教育関係のニュースや論説の重要な部分を選んで英訳紹介するといった具合であった。思うに、かし子は日本人読者を対象として書く場合は、やはり一般的な社会意識の後進性の中で、その表現のしかたも漸進的なものならざるをえなかったが、英文で書く時はミラー夫人がいうように「アングロサクソン」⁽⁵²⁾ 的思考で自在に書くことができたのか、かなり明瞭な見解を、しかも日本婦人の誇りをもって堂々と披歴している。即ち前に紹介したフェリス女学校教師時代の英文手紙や演説のたぐい、また同じ教師時代に書いた “The Condition of Woman in Japan”, 更に *The Japan Evangelist* 誌上での諸議論がそうであった。とはいえ全体としてはやはり先のような漸進的改良論の域を出るものではなく、その意味で日本語で書かれたもの、英語で書かれたもの、教師時代のもの、結婚してからのものなどその基本的立場は終始一貫してい

るのである。

“The Condition of Woman in Japan” は米国バッサル女子大学 (Vassar College) の世界の女子景況調査依頼に応じて、日本の女子教育の現状及び女子の自立の手段について、政府統計などに基づいた報告とともに、自分の観察見通しなども書き加えた論文で、20年11月に送られて米国諸新聞で評判となったが、21年2月25日『女学雑誌』にも掲載された。その中でかし子は教育は言うに及ばず、政治社会外交等の透徹した事実分析に基づき、日本の女子教育への社会的理解の高まりを、前向きに評価しながら、現状のまだ理想にほど遠いこと、その発展を妨げる諸要因などを指摘するなど、文学者らしからぬ、むしろ社会科学的な冷静な目で観察評価し、そして展望を述べている。まずかし子は、日本社会の政治社会的変化に伴い社会の上層部で女子の中等教育が広く要求されはじめ、家内にとどまり社会的に無智無関心であることが婦人の美德とされた時代は過ぎ去って、妻は夫と対等の立場を認められ、独立してその歓楽と社会奉仕のため連帯し始めたことを述べ、この現象がやがて社会全体に広がってゆくであろうと予見している。

These social innovations in the upper stratum of society, made all the more conspicuous on the back ground of rigid social conventionalities and stern restrictions of old Japan, can not fail to influence society in general. またジャーナリズムが “Woman Question” をとりあげ、識者によって婦人の地位、能力、女子教育等の議論が活潑になされ、社会の関心が高まって education of womanhood for the improvement of the social condition が広く認識されてきたことも紹介しながらしかし、なおそれが社会の上層部や中産階級、インテリ層のもので、下層階級に広がっていないことを今後の課題としている。

woman's education having thus originated in the upper strata of society, and being advocated by the more intelligent of the people, its influence has not yet permeated the lower classes of people.

このような総論のもとに、かし子は女子教育の現状と女子の自立の方法について

述べ、女子中等教育の発展だけでなく高等教育への道も開けてきたこと、中等教育の発展においてミッション・スクールの貢献度の大きいこと、学校という公教育機関だけでなく婦人修養団体も多く組織されて女子の知的道徳的向上に役立っていること、早婚が女子教育の発展を妨げていることなどを指摘しながら、全体として女子教育が大きく前進している事実を強調している。しかし翻って日本婦人の自立の実態をみる時、法律的に財産分与権はもたず、また結婚時に妻の財産となるべき嫁入り道具や持参金のたぐいも、上流社会に限られたことで、女性は一身にいかなる経済的保障ももたないといっている。しかも、

She is religiously trained to think that marriage is her only legitimate destination and the home of her wedded sovereign, her only available refuge.

という社会通念がいっそう彼女らを不幸にしている。むろんこれまでも茶、生花、器楽、歌、舞踊などを教えたり、またより低い職業として産婆、裁縫、洗濯、髪結いなど女子の仕事があるにはあったが、それらは必ずしも社会的に尊敬され、女性が一生の仕事として意義を感じて従事しうるものでなく、多くは必要に迫られてつくものであった。しかし事情は好転しているという。

Under the new era for women in Japan, this state of things has, of course, been revolutionized. Her rights trampled down and kept so with the weight of moral and religious sanction, together with the social usage of 25 centuries, can be successfully indicated only with the prestige of her material as well as her intellectual and moral worth.

このような女性の新紀元においてその新しい職業として脚光を浴びるにいたったのが教員である。かし子は森文相の女教員養成の意見を高く評価し、また特に英語教員が求められてミッション・スクールがその需要に答えていることを喜びながらも、しかし教師を一生の仕事としようという女性は少ないとしている。それ以外の女性の職業として婦人科医師、ピアノ、ヴァイオリン、日本の器楽等の教師、西洋画及び日本画家、レース工場の職工などが認められつつあり、それら職

業訓練のために実業学校が設けられ、洋裁、和洋手芸、絵画、陶器彩色などを教えていることも書いている。さらにかし子は特に女性の文学、知的活動の現状にふれ、その分野がまだ非常に遅れており、そのレベルは日本中世の女性文学にはるかに劣るとしている。しかし女性の権利に関する論文、文学作品、翻訳、家政、哲学等の書物の出版など女性の手になる文献が少しずつ現われてきたのは将来の展望が明るいことを示しているという。最後にかし子はこの論文の結論として、日本は西欧文化を取り入れて様々な形で近代化しつつあるが、まだ学んでいないのは真理であるといい、キリスト教文化が社会の隅々に浸みわたることを念じている。

かし子が単に中産階級以上に向かって良妻賢母を説きその限りの婦人解放、女子教育を主張したのではなく、問題の所在を認識した上で現実的な改良論を述べざるをえなかったことは以上のことから明らかであるが、彼女はその階級的規定や良妻賢母の枠を越えようとし、そのために女子教育の振興を考える他、女子に対して、階層を問わず広く職業訓練などの自立の手段を身につけさせる必要も強調していた。かし子は『女学雑誌』27年6月30日号「婦人の生存競争」で次のように述べている。「中以上の婦人たりとも、職業を習ひて万一独立することあらん時の必要に対し、準備すると云ことに何か不都合有之候はんか？もと産業を受け継ぐと定まり居りてさへ、男子は尚ほ此目的をもつて教育致され候様なるに、婦人に至りては、あてになる様な、ならぬ様な、婚姻といふ一事を頼ませらるる耳にて、万一の用意としては與へられず、依ていとも哀れなる境遇に陥り候こと屢々有之候。右に付き父兄たる人々に少しく注意して戴き度ふふしぶし……」として、昔に比べ女子にも様々な仕事のある時代だから「女子を教育するに先だち、其人の嗜好、傾向に注意し、最も愉快に最も成功し易き方方を撰び候が専一に御座候」といい、「茶の湯、香花の如き無益ではなくとも、さまで必要でなき技芸は略きても」「万一の時の立身事業とし玉ふ可き程のものを仕込み玉ふ親切は鬼に金棒與ふる訳にて、慈悲深き親御の第一の義務は其時始めて果し玉ひしことと申し上ぐ可く候」と書いている。

The Japan Evangelist における婦人論をひろうと、まず27年6月婦人欄の論説で、キリスト教が日本婦人に伝えられた喜びと感謝を記しながら、その効果がなかなか顕著に現われない原因について、日本の頑強な婦徳の存在を述べ、新しい教育を受けた女性の置かれている苦境を語りながら、なおその中で自分たちに課せられた使命を勇敢に担っていく決意が述べられている。28年2月号の婦人欄論説は、27年11月25日号『女学雑誌』の善治の筆になると思われる「女学界今後の大勢」を英訳したもので、従来「内」にとどめられていた女子の役割が時代とともに変わってゆくことを述べ、新しい時代における男子の内外での helpmate としての女子の自覚を促している。また28年10月号の婦人欄論説は *Some phases of the Japanese Home and Home-discipline* と題して、祖先崇拜、及び儒教主義と結びついた日本の家意識、家族主義を欧米との比較で述べ、「国家」という言葉などに見られる、日本における家族関係の重要性と、これに対する個の従属性を指摘し、家原理の中での嫁の立場、夫婦関係の欠陥などを批判的に記している⁽⁵³⁾。日本において男女が結婚する場合、次のような意味をもつといい、

When they two are united under one family name, whether that belongs to the husband or to the wife (as it frequently does), they become joint guardians of that ancestral name and family prestige, their individual interests being of secondary importance.

また嫁は the common property of the house であるという。そして総じて次のような批判的態度で臨んでいる。

We deplore the many evils that have issued and still do issue from the ancient household system in Japan.

以上述べた所から明らかなように、かし子の婦人論は一見儒教的伝統的な婦人論の域を出ていないようで⁽⁵⁴⁾、実はその内面には本質的な価値の転換があったといえる。かし子は「世話女房たる小女が坐右の銘ともして珍重いたし候金玉の言葉」として主教 H. E. Manning の次の言葉を掲げているが、

Every duty, even the least duty, involves the whole principle of obedi-

ence. And little duties make the will *dutiful*, that is to supple and prompt to obey. Little obediences lead into great. The daily round of duty is full of probation and of discipline; it trains the will, heart and conscience. We need not to be prophets or apostles. The commonest life may be full of perfection. The duties of home are a discipline for ministries of heaven.⁽⁵⁵⁾

このようにかし子において日々の生活責務に忠実であることは、それ自身大いなる意味に連なるものであり、またそうでなければならなかった。彼女の思想、とくに婦人論にはその肉体的限界からくる社会活動の制限が強く反映されていることも理解しなければならないが、それでもなお、それが実はキリスト教的信仰によって伝統的儒教的道德論を乗り越えた高い人生の理想を追求するものであり、その外見の保守性の中には無限の新しさ、即ち今日の我々が追求してなお得られぬ本質的な新しさが秘められていることを知らなければならない。ブースはかし子の婦人論の意図を次のように解説する。

The welfare of the women of Japan lay as a heavy burden on her heart. She would talk over with her friends the plans and schemes that were in her mind for their amelioration and development. She desired that the opportunity for the exercise of moral liberty, which the teachings of Confucianism, the indifference of Buddhism and the consequent conventionalities of society had deprived them of, should be restored to her country-women. She realized, moreover, that through effort, a determined struggle, and the development of reflection and reason, they could alone obtain an enlarged exercise of this liberty of choice, and she looked to Christianity, especially to Christian schools and the development of a Christian literature as the agency *par excellence* which in time would accomplish the same results for her Japanese sisters that it had accomplished for the women of Christian lands.

For this she lived, for this she died!⁽⁵⁶⁾

このように婦人解放がかし子の一生の最大関心事であったことから、ジャーナリズムは彼女を「新しい」婦人の代表のようにみなしたがそのかし子の「新しさ」の真実の意味をブースは次のように述べている。

A new woman undoubtedly she was, not in the sense, however, which has come to be attached to that term on account of the appearance of a few monstrosities in modern civilization,⁽⁵⁷⁾ but a new woman in the highest and best sense. A regenerated woman directed by the forces of a new life.⁽⁵⁸⁾

夫善治の経営する明治女学校校内に住んでいたかし子と親しい間柄にあった同校教師 Alice Miller も、キリスト教女子高等教育が生み出したキリスト教文化の一つの優れた例証としてかし子を次のように評している。

The lives of such women as she was, are an answer to all that can be said against the higher education of Japanese women in Christian schools; and so she was not only a helpmeet for her husband in the great work to which he is devoting his life, but she was a noble exemplification of the blessedness of Christian culture.⁽⁵⁹⁾

C. ナショナリズム

かし子がミッション・スクールの日本人による経営を願い、旧い和漢学の重要性を認識し、批判しつつもある種の日本の伝統的諸価値に共感していたことなどは、彼女に単なる欧米崇拜でない一種の文化的ナショナリズムのあったことを知るのに充分である。(それらがフェリス女学校の教育の中に存在したことも先に指摘した通りである。) また *The Japan Evangelist* の婦人、子供欄の主筆として、外国人によりよく日本を理解してもらおうという意識も作用してか、そこにはかし子の並ならぬ愛国心、日本文化への誇りが脈打っている。それらは写実主義文学の代表として西鶴の作品や加賀千代の俳句を英訳紹介したり、日本史上の賢婦人の業績を語り、四季折々の日本の生活習慣、子供の遊びの中にそれぞれ大切な意味があることを紹介することの中にみられる。*The Japan Evangelist* の

性格にもよるが、かし子がこの Woman's Dep. と Children's Dep. で日本の文化、宗教、社会事情などを外国に紹介した功績は、まだ日本が正しく理解されていない時代だけに大きく、それは彼女の英語力によることは無論のこと、それらの問題に深い関心と理解をよせ、また巖本善治を夫として最も新しいニュースと思想に接しうる状況の中で、つねにそれらに精通しうる立場と能力をもったかし子にして初めてなしえたことであったといえる。また更に重要なのは、それら評論の類が単に聡明で適格な日本紹介に終わらず、冷静かつ公平な目で現実を直視しながら、なお彼女の切々たる愛国心と日本文化への誇り、特に欧米に対して一歩も譲らぬ独立心溢れた日本人の気概に裏打ちされている所に、一層それらの文章のもつ魅力と風格が現われているのである。善治はかし子の遺著『小公子』の後序の最後に「今少し長生きさせて、日本文学の粹と、日本国民の精とを、外国の方々に訳述させたかった」と書いているが、かし子はまさにそのような仕事にふさわしく、英語の氾濫する今日ですら、彼女ほどこれにふさわしい人は少ないと思われるほどである。

ところでそれら一つ一つの日本紹介をここに示す余裕はないので、むしろ以下において、彼女の思想を特色づけ、多少問題の残る彼女のナショナルイズムのいくつかの相について指摘してみたいと思う。

第一は日本文化とキリスト教の問題である。かし子は次の文に代表されるように、長い歴史をもつ日本の伝統的文化の厳たる存在を認め、かつこれを高く評価していた。

Japan, like any other ancient country, has had an unique national life and history. She boasts of a civilization, a code of morals, a form of government, and a system of education all peculiar to herself and she cherishes these as heirlooms expressive of the wisdom and experience handed down through the whole line of her ancestors.⁽⁶⁰⁾

そのような日本文化に対してキリスト教はどのような意味をもつかというと、それは既存の文化道徳を破壊するものではなく、それらを越えて聖化し、その粹に

眞の命を与え、力を与えるものだといふのである。

Now Christianity has come in not so much to destroy and do away with old forms and institutions, as to sanctify and give life to existing matter, as well as to add much that is precious to individual and social life. A Christianity vital to our nation must be that which, in its apprehension and application, is worked out to be a power which will endorse and transcend all that has been the soul of old Japan.⁽⁶¹⁾

むろんかし子は先の婦人論でもみたように、古い体制の中に新しい思想が注ぎ込まれる時、そこには必然的に諸価値の相剋があり、伝統的日本文化の中にキリストの眞理を實現してゆくことの容易でないことは充分承知しながら、

However interesting a position ours is, I myself do not think I would exchange it for that of another woman belonging to any other nationality. With our increasing privileges and opportunities, and with fields of thought and action so very much broader than those which fell to the lot of our mothers and grandmothers, we surely have enough encouragement to put forth our best Christian efforts. I say again, I would not change places with any body.⁽⁶²⁾

このように述べて、国を愛し日本人として与えられた状況に満足しながら、勇氣をもってキリスト者としての責任を推進してゆこうとするのである。また子供欄で、日本の百姓たちの「雨乞い」を紹介した“Praying for Rain”なる文章の中で、その雨乞いは単に日本だけに限った偶像礼拝と墮落だろうかと反問し、キリスト教国にも拝金主義があり、また単に商売目的のために教会にいく人間もいるとして、問題は日本、西欧、先進、後進の別なく共通に、人間というものが安易に肉慾の働く機会に流れがちだということ、みな神ならざるこの世のものにひざまずく弱い人間だということだと述べて、互いの自戒を促している。

……do you know I somehow cannot think that their idolatry is worse than that of many in Christian lands who make money their god, for example.

Was it their depravity?.....some people among you who make church going their principal in trade are perhaps just as depraved as those.....I thought how hard it was for all of us to learn that we do not live by bread alone and how easily we will bend to anything that may give us worldly comfort or subsistence.⁽⁶³⁾

さらに “The Story of a Young Priest”⁽⁶⁴⁾ では若い修道僧が「不動」の力で悟りに開かれる昔話を紹介し, “Japanese Women in Religion”⁽⁶⁵⁾ では推古天皇他, 日本史の中の熱心な仏教婦人たちを紹介して, 日本にも優れた信仰のあった事実を示し, キリスト者の責務は彼らに真理を伝えることであるが, またキリスト者自身, この異教に学ぶ所はないだろうかといっている。かし子は日本在来の宗教のうち神道の内容は貧しいが, 仏教は優れた東洋の宗教であると考えていた。

Let these facts speak for themselves. Christianity will have to teach, nay it has the holy work of converting, these sisters. But Christian women may, on the other hand, also have some things to learn from their heathen sisters. またこれは『女学雑誌』上の善治の文の翻訳であるが, 女子教育の必要を力説した後, 西欧化された教育や西欧化されたキリスト教でなく, 独立的な日本の教育, 日本のキリスト教でなければならないという文を論説として掲載している点にも注目しなければならない。

The only thing that would require our care and attention at such a juncture would be that the education given should not be a foreignized education, but one that is adapted to New Japan, one that is the outcome of the independent Christianity of Japan.⁽⁶⁵⁾

このようにかし子におけるキリスト教と日本文化の関係は, キリスト教を西欧文化とは必ずしもとらえず, 日本人としての誇りをもちながらキリストの真理を実現してゆこうとする主体性ある姿勢もみられるのであるが, その間の問題が, 必ずしも自覚的に整理されておらず, 曖昧さとともに問題も残している。

第二にかし子のナショナリズムに関して特色あるのは皇室観である。アメリカ人が特に皇室に関心をもつこともあってか、かし子が *The Japan Evangelist* で皇室に関して書いている部分は決して少なくなく、これは彼女自身が一人の明治人として皇室に対し、なみなみならぬ敬愛の念を抱いていたことの表われでもある。“Our Beloved Empress”⁽⁶⁷⁾ と “Yoshihito Haru-no-Miya, the Crown Prince of Japan”⁽⁶⁸⁾ がその代表的な例である。前者でかし子は、

No doubt the patriotism and the loyalty of our people is one chief source of our national strength.

と明言し、婦人欄と子供欄でそれぞれ皇后と皇太子に関し、親愛をこめた筆致でその人柄、国家的役割などを紹介している。しかしそうした皇室観も、近代的合理性が許容しうる constitutional monarchy⁽⁶⁹⁾ の範囲を越えるファナティックなものでなかったことはいうまでもない。

第三に問題とさるべきは27年8月に始まった日清戦争への協力的態度である。当時、日清戦争に対して異議をとなえる日本人は、キリスト者の中にもほとんど見出せなかったほど、これは国を挙げて協力した戦争であったが、特に巖本善治は、『女学雑誌』誌上で日清戦争をもって「日本人が海外聖導に着手すべき聖機の到来」とし、⁽⁷⁰⁾ 全面協力の態度を示すばかりか、押川方義、本多庸一、松村介石、原田助等と計って「海外教育会」を創立して朝鮮伝道を行なおうとしている。かし子においてもこれを反映し、決して盲目的な協力ではなくキリスト者としての批判面も残しながら、日本人のとるべき態度を協力的な筆致で書いているのである。“Our ‘Dai Nippon’ (Great Japan) for Christ”⁽⁷¹⁾ では戦争について語る二人の少年の会話の中で、日本は地理的には中国と比べものにならない程小さいが、万世一系の皇統の下に団結しているところにその真の強さがあるといわしめている。

……our 46,000,000 people are united under one sovereign. That our Emperors are of one continuous descent……has a great deal to do with the present unity……there are perhaps no people as large so strengthened by

unity.

また日本にも他国にまけない、サムライという勇猛果敢で忍耐強い英雄たちがいるといっている。しかしこの時点でかし子が真に述べたかったことは、単なる国民の士気の高揚ではなく、戦争が実は人間の罪から出たものであることを知るが故に、すべての国家的活動が、本質的にキリストに導かれたものでなければ大きな過ちに至るという自戒であり警告であり、またそうあることへの祈りであった。

We all know that unless Christianity comes and sanctifies the country and the people, our national unity will be of very little account. For we will run into mistakes and sin in one great body. The war will be a failure as well as any other national movement. *Dai Nippon cannot be great unless it is all for Christ.*

しかし27年12月婦人欄の論説になると、少し論調が変わり、この戦争は正義の戦いであるといい、日本が善戦を続ける中で犠牲となってゆく多数の人々のことを思い、それらの死に宗教的意味を与えることにキリスト者の任務を見出している。その論説は、

Every report sent back from the battle-field tells us that we have been victorious over our rival army. The voice of triumph is heard throughout the empire, flags are unfurled, and rejoicings made at the repeated success of our countrymen.

という勝利しつつあることへの喜びの言葉で始まるのであるが、すぐさま、一方で生みだされる多くの悲惨な犠牲に目を転じている。それは敵味方の別なく戦争が生み出すあまりに痛ましい事実であるという。しかしそれらの死の中でも、

It is a blind despairing grief for the dead, that which is not lighted by the hope of immortality.

といっていまこそキリスト者が永遠の命を証しする時であるとする。無駄な死が単なる悲しみに終わらないために永遠の命への福音がその死への慰めとなり、さ

らにはこの機会に、罪の結果としての戦争という禍が転じて、全人類が福音を知る福に転じることを願っている。

Now is their opportunity to bear witness of the Heavenly life, the happy reunion of the great forever.....The joy of the Gospel will surely be a healing balm to bleeding hearts. War, which is the outcome of human lust and fraught with many sins and miseries, is in a way, transformed into a blessing. In the Almighty Hand it is changed into a good for the human race, like every evil in this world.

また同じ27年12月号の子供欄では、“The Two Corporals Going to War” と題して国のために戦地に臨む兵士の心意気を称えながら、同時に戦争の悲惨さを説き、子供たちには同じ心がけで、戦争のためにではなく、日々正義のために戦い、そのために命を失うことが、真に命をうることでであると述べている。

However there are many kinds of fighting in this world, and suffering and loss of life are not the greatest on the battle-field. God allows it that the better side may win, that righteousness may have victory and that we may all wear a crown by and by. Let us be brave in the daily fighting that we have to do. Let us learn the important truth that when we are most willing to lose our life we are gaining it.

日清戦争終結後の28年6月の子供欄では、端午の節句にまつわる日本の英雄たちを紹介した後、戦争の終結を喜び、子供たちが痛ましい戦争にではなく、平和の中で、あくまでより意味のある人生の戦いに勇敢であるよう期待している。

.....will you not pray for the boys of Japan, that they may grow to be as brave as those heroes and as daring as *Koi* fish, not in bloody wars, but in the still greater battle of life, and that they may really prove themselves the blessed harbingers of a long, prosperous and peaceful era for Japan?

このようにかし子は、戦争はどんな理由から生じるものであれ人の命を踏みにじ

る罪深い行為であると思いながら、一たん始まってしまった戦争に対しては、日本国民として何らかの正当化の根拠を見出し協力せざるをえなかったのである。そこに存在するかし子の思想的矛盾が実はアジアのリーダーとしての日本という誤ったナショナリズムに基づいていたことは次の記述から明らかである。かし子は勝利の結果領有した新植民地台湾問題に関して、次のような判断をしている。29年2月婦人欄論説“New Fields for Japanese Women”において、台湾の初代学務部長として赴任し、一時帰国した伊沢修二の

“What we want for Formosa is educators who will go there in the spirit of a missionary,—yes, we need missionary teachers.”

という言葉を用いて、新植民地への使命、アジアにおいて日本婦人の果すべき役割を次のように論じている。

(Mr. Izawa's speech) put us in mind of the silent call extended to us women of Japan, not only from Formosa but from our sister countries across the seas on the great continent, to come and minister to them as missionary teachers.

日本はアジアにおいて最初に西欧文明に開かれ、これをアジア化しえた国として、朝鮮、中国、台湾等のアジア諸国にこれを教え、欧米人に代わって導く責任がある、キリスト教伝道も又然りだというのである。

Japan as a nation has been given the noble privilege of being the first to receive and interpret the civilization of the West. Standing at Asia's gateway, the task assigned her seems to be to open her mind to Western ideas, to assimilate them, and then to give them to her sister nations in a more or less modified form. Christianity, like many other gifts from the Occident, must first be studied and reduced to its purest fundamental elements by mind other than European before it can be comprehended by the Asiatic mind. Christianity often comes in forms too highly colored with Western modes of thought for our ready appreciation. It stands to reason,

therefore, that we can approach our Korean and Chinese sisters as well as our own in Formosa with better facility, perhaps, than our Western sisters. そして巖本善治らの「海外教育会」に呼応して、婦人達もこのアジア伝道という「聖務」に参加すべきだと述べている。

d. 幼児教育論

最後に、かし子の思想において特筆すべきは幼児教育論である。かし子が幼少年教育に関心をもち、彼らの教育環境を改善しようとし、そのために文学作品を書いたことは先に述べたが、彼女は幼児教育法そのものにも興味をもち26年5月以降しばしば家庭における子供のしつけ方について言及している。フェリス女学校の当時の教育目標からみて、かし子の在学時代にも何らかの形で教育学に類するものが教えられたとも考えられるが、やはり長女清子がそろそろ満3歳になろうとし、次に長男莊民もいて、彼女自身が子供のしつけに本格的に取り組まねばならない時期になって、家庭における母親の重大な責任を喚起するため、そうした発言をするにいたったと考えられる。しかしただそれだけのことで、かし子の幼児教育論を紹介しようというのではなく、むしろそれが彼女の文学の前面にもでてるように、子供を神聖視尊重しすぎると思われるほど、今日の我々からみても注目に値するだけの、当時としては珍しい「児童中心主義」を特色としていられるからである。それは子供のころ家庭に恵まれなかったかし子の理想化された家庭観、親子関係ともいえるが、明治20年代の一つの幼児教育論として特記するに値するであろう。そこには『小公子』の有名な自序にみられる児童観、幼児教育論が一貫して説得力をもって語られ、その確固としてゆるがぬ児童への信頼、尊敬とすらいえるものは、彼女の原体験以上に、聖書をつらぬく天国の世継ぎとしての児童観に根ざしていると思われるのである。

かし子には「幼児家庭教育の原理」⁽⁷²⁾ という翻訳文もあるが、彼女自身が書いたものによってこれをみるとすると、まず、25年3月に公刊された『小公子』序文における児童観を挙げなければならない。「心なき人こそ、幼子を目し、生

ひ立ちて人となるまでは真に数に足らぬ無益の邪魔物の様に申しませうが、幼子は世に生れたる其日とは言はず、其前父母がいついつにはと、待設ける時分から、はや自ら天職を備えて居りまして、決して不完全な端た物では御座りません。されば私どもが濁世の蓮花、家庭の天使とも推すべき彼の幼子の天職は、いとも軽からぬことで御座ります。……邪道に陥らうとする父の足をとどめ、卑屈に流れ行く母の心に高潔の徳を思ひ起させるのは、神聖なるミッションを担ひたる可愛の幼子に限るので、是に代って其任を果すものは他に何も有りません。……仮に幼子の住まぬ世を想像いたしますれば、利慾に奔走する人心が、此上どの様に罪深くなることでせうかと、恐ろしい様に思ひます。……私は深く幼子を愛し、其恩を思ふ者で、殊に共々に珍重す可き此客人を尚一層優待いたし度く、切に希望いたします。」このように子供は大人でないからといって不完全な存在でなく、それ自身完全な存在、人格的主体にとらえ、しかも大人がなしえぬ崇高な使命をもった存在であるという。それ故かし子は大人の方がかえって「恩」を思わねばならぬほど大切な「客人」としてこれを「優待」したいというのである。このよのに児童を把える時自ずからその対し方も決まってくるのであるが、基本はその子供が本来備えている完全性のまま、親はできるだけそれを真直ぐ素直に發育させてゆくことであった。そして人間は本来完全性を備えた存在であるからこそ、幼児期の扱いは将来に対して決定的な意味をもつのである。それほどこの「ホームの教導者を先ず教へ導き、其清素爛漫の容姿を發揮させ、其ミッションを完うさせる」両親はじめ大人達、特に母親の責任は重いのであった。かし子が初めて『女学雑誌』の家政欄に幼児教育について書いたのは、26年5月13日号である。（「子供について」）それによると「未来の日本国民を薰陶る婦人の役目は実に軽いことでは有りません」といい、「社会が天然自然の自由を離れて人工的の虚飾に流れて行く」に従い、「理屈は言へず、権利を主張することは知らぬ幼き人たちが迷惑することがどふしても多くある様に思われる」といい、例えば立派な座敷、茶の間、書斎、茶席が備わっていても、子供の部屋はなく「子供は扨なく間から間を食客の様に彷徨ふてありき、あちらへ行つてはならぬ、ここでも邪魔だ

と首縄がられ、落着く処なきはしたものにされてをるのが極く極く通例」だという。学問のある母も育児となるとその智識を適用しようとせず、従来通りを行なって改善しようとしないので「成人と子供との間の圧轢はいよいよひどくなって」いる。「逆も今の社会の有様では理想的充分に此小国民を優待することが出来ません」として、かし子は具体案として「同じ虚飾的な生活をする中にもなる可く子供の権理を保護し、切めては家の中一室丈も子供等が自由を足す便に備へ、年令相応の研究も出来、楽しみも尽せる様にいたし度と思升」と書いている。そして更に子供の衣服について述べ、そのうち「嗜好も少しづつは実用の方に向いて来る」だろうから、体裁を気にした美しい上等の着物より「子供の自由を妨げる」ことのないような「發育」を考慮した「さっぱりと可愛」いものを着せるべきだとしている。同年6月10日号の「子供に付て(2)」では、「凡そ子供の躰をするには、同情をもつ、思ひやるといふことが何より大切かと思升、三才児なら三才児の身になって見、七つなら七つの児の心持になって見なければ」いけないといい、「子供を躰る目的」は「立派な機械にしよふというのではな」く、「品性の立派な気立ての好い人間にしよふという」のだから、「行儀作法などのことはなる丈大目に見て」、子供の心に「徳義上の觀念」をしっかりと植えつけることこそ大切という。しばしば子供をしかる場合、子供の過失に腹を立て、親はその癩癩のやり場に困って子供をなじる場合が多いが、それではかえって親の威厳をそこない肝心の躰はできない。子供の身になって失敗はみな「稽古中のこと」と考えて大事なことだけをしっかりと教えこむことが必要である。7月8日号の「子供に付て(3)」にも注目すべきことが書かれている。母親たるものが家政万端を完全に行なうことに力を用いすぎ肝心の子供との接触が充分でないということである。「下女を教へて追々は任かせて差支のない家政の細かいことを自分の手一つに引受け、子供は邪魔物の様に下女と遊びに出すといふ様なこと、これらは実に親子の間の親睦を破り、教育の上に虧からぬ害を及ぼす原因と思升、中以下の人々の家庭は此一事には却って上等社会の者より勝って居ることが有升、されば心ある婦人はたとひ人を雇ふ資産のあるにもせよ、なる可く幼児を手なづけるが大切と思

升。」「大切な御国の小民」が手に委ねられているのであるから、生活を合理化し「大抵のことはあと廻しにして、専心にその為に尽すのが至当で」ある。「子供のためには母に勝る保母は」ないので、「子供の嗜好を考へ、工夫を凝して、其心術を発達させる方法を取らねばな」らないし、「長の年月學術の研究に心を潜められたお方には、家庭教育に是非お技倆を見せて頂」きたいといっている。もう一つの論点は「子供にも少し自由を与へる様に致し度」ということである。子供には「禁制的の言葉計が」多く、「子供は吾儘な様ですが、それは遠慮するか、人の為に忍ぶとかいふ徳義上の考の起らない先のことですから拠ない」ので、「子供がたとひ思ふ通りに振舞わぬとて、是非造つた模型通りに箝込まねば承知せぬといふことは理性を備へた親たちの為ま敷ことです。」特に「自由を与へて置ねばならぬ、極大切なことは、子供の遊戯のことです。」「子供の遊戯は大抵其発達の機械で成人の、日々の事業と異った事はないのですから、なる可く賛成し、手助けもして子供の歡樂を増してやるが宜し」いという。11月11日号では「曲れもの」について述べ、生れつきの曲れものはおらずすべて指導する者の責任によるという。そしてその原因をみると多くは厳に過ぎるか寛に過ぎる場合に生じるとして「思い遣り」と「嚴格」と「方正」を「適宜に調合した」方法で育てることがよいとしている。

このように幼児教育上のいくつかの要点を述べた後、かし子はその基本とすべき教育姿勢について次のように言っている。「幼者を教育する心得は、敢へて、我意の如くに矯正するといふではなく、一方には万世不易の堂々たる道德を認め、それに向つて我も進み、さては弟の歩みも助けて、同じ方向に伴わせるといふ覺悟にあること故、己れ先づ一身を重んじると共に、幼者を重んじ上帝の生み玉ひし愛児の必ず望を終局に達するものと信じ且つ幼きものにも、其信仰と自任とを絶へず心に燃やすことにあると確信いたし升」としめくくっている。ここで我々はかし子の所論が一見、子供の内在的可能性に大きな信頼をよせ、これを導く母親の教育責任を強く喚起しているように見えながら、実は母親も子供も、教育者も被教育者も、共に一人の人格として一つの真理を望みみて謙虚に勇氣をもつて

進んでゆく所に真の教育が行なわれると考えていること、即ち真に人間を教育するものは人間自身ではなく窮極には、すべてを支配する造物主であるとするキリスト教教育論の系譜に列するものであることがわかるのである。この意味でかし子の幼児教育論も単に母親としての体験から生れたというより、深くキリスト教信仰に根ざし、その人間観から導かれる力強い根拠をもった教育信念であったといえる。むろんかし子にはこれを体系的に展開しようという意識はないが、その所論を日本の近代教育史上に据える時、これまで「教育」の対象にのぼらず、いわば惰性で行なわれてきた家庭における幼児教育を人格形成の基礎固めの時として重視し、これを自覚的にとらえ直し改善しようとする試みは、必ずしも思想・実践として充分展開されていないにもかかわらず、形式的しつけを排して子供の主体性を重んじ、発達段階に応じた対応と母親との愛情の交流を強調するなど、そこに指摘されるいくつかの示唆とともに、教育史上看過できない意味をもっているといえよう。

む す び

以上、フェリス女学校時代を中心としたかし子の思想形成過程と、その思想の特徴的諸様相をみてきたわけであるが、これによっていままで必ずしも明らかにされていなかった創成期のミッション・スクールの教育理念・教育内容の実際について幾分でも明確にすることができ、またこれまで一文学者として局限されて取り扱われてきたかし子の全体的人間像、その斬新で力に溢れた思想の構造と特質を明らかにすることができたとすれば幸いである。かし子の思想は文学思想を始めとしてフェリス女学校の教育の強い影響下にあるばかりでなく、彼女がおかれた時代の思想状況、また当時の女性の地位、さらに彼女が属した新興中産階級の資本主義勃興期における明るく積極的で健全な思想を反映している。かし子はフェリス女学校において血肉化しえた欧米のキリスト教文化を、自己の体内において伝統的な日本文化・思想とさしたる矛盾の自覚もなく調和し、これを日本社会に具体化してゆく責任を、女子教育、文学、家庭改良、社会啓蒙などの手段を

通じて、力強くしかも現実性をもったやり方で懸命に担っていったといえる。本文中では特にふれなかったが、彼女の思想の特質としてここに付け加えておきたいこと——その思想の全城にわたってみられる、発想の極めて実用主義的合理主義的性格がある。明治女学校に学び、『女学雑誌』の校正に従事した羽仁もと子が、果してかし子に影響を受けたかどうか定かではないが、かし子の思想には教員時代の高邁な理想を掲げたものとともに、後のもと子を思わせるような日常的で身近かな改善から手がけてゆこうとする具体的、実践的な合理化の姿勢がみられるのである。特に主婦の社会的役割の自覚、家庭改良、幼少年教育に関する所論がそうであるが、さらには文学さえもそれ自体を目的とせず、社会の啓蒙、人間性浄化のための手段と考えていることや、婦人の地位向上、女学振興についても原則論を述べるより現実的実際の態度で臨み、同様に基督教の土着化という課題についても、日本文化に対決して純粹福音信仰をうちたてようというより、その姿勢はもっと柔軟である。しかしそれらのリアリスティックでプラクティカルな方法と所論が、決して通俗的で緩慢な「生活の知恵」の披歴に終わるのでなく、基督教信仰を基礎とし欧米文化の正しい受容によって洗練された、高い精神性と強靱な意志、そしてそれらによって可能となる確固たる近代合理性に貫かれている所に、彼女の思想活動の真の歴史的価値があるといえるのである。

とはいえ筆者はかし子の思想を手離しで礼賛するものではない。彼女の信仰内容について自ら語ったものが少なく正確に把握することは困難であるが、今日の我々がみて一つ問題と感じられるのは彼女の思想に、ある肯定的人間観がみられることである。女子の人格的尊厳——自由を主張するにおいても、子供の生れながらの神聖さを強調する点においても、我々は彼女の中に人間の直接的肯定、人間が本来的に自由であり神聖であるかのような理想主義的人間理解を認めざるをえない、つまり人間の原罪に対する深い洞察がないのである。かし子の文学に物足りなさが感じられるのも、この点である。しかしこれは一人かし子の基督教信仰の問題ではない。明治期前半の基督教は多分に倫理的啓蒙的性格をもっていた。敢えていうなら基督教は、西欧近代文明、ヒューマニズムの衣を

まっていたが故に当時の日本社会に受け入れられたのであり、またそのようなヒューマニスティックな人間解放の役割を期待されたのである。このような文化的キリスト教に内在する問題性は、既述のように日清戦争時にかし子が戦争を人間の罪の結果と捉えながらも、その問題を深め徹底させえず、むしろ卑俗な日本の近代化路線に譲歩してしまっている所にもあらわれている。民権拡張期、資本主義勃興期の日本社会の物心両面の近代化要求、新興中産階級の自立への要求に呼応して優れた指導性をもったかし子の思想も、日本社会が反動化し新たな段階に入る明治中期以降、日本文化とキリスト教の相剋の問題など必ずや試練の時期を迎えるはずであり、それは既述の「ナショナリズム」の項でもうかがわれた所である。この点の問題性は夫巖本善治においてもっとはっきりしている。ここで善治の思想まで取り上げる余裕はないが、彼の人文主義濃厚なキリスト教理解、婦人解放論、啓蒙思想等は日清戦争以降次第にその内部矛盾を明らかにしてゆくといえる。しかし明治前期の日本社会が強く求めたのは善治に典型的にみられるような、いわば積極的肯定的楽観的思想であった。かし子が結婚後、善治の思想活動に大きな影響をうけたことは想像に難くない。しかし思想の中核といえるキリスト教信仰においてみる時、両者はかなり性格の違うものであったのではないだろうか。かし子は米人宣教師らの直接的薫陶をうけたばかりでなく、ヘボン、ブラウン、バラ他、いわゆる横浜バンド系の日本人キリスト者の間接的影響下にあったが、一方善治は中村正直、津田仙、木村熊二らいずれもユニークな信仰をもった日本人を通じてキリスト教に入っている。この辺の差異が両者の信仰的質の相違、さらにはかし子の思想の本質的な硬さと、善治の時代感覚鋭い柔軟さにつながるといえるのではあるまいか。二人の思想活動は一見同一線上にあるように見えながら、かし子の生涯こそ、まさに「只だ終りまで主を信じ、其の恩寵をさとり、之に事へし者たる」⁽⁷³⁾のものであったといえるのである。

註

- (1) フェリス・セミナリーの正式の和名は創立からしばらく一定しておらず、『女学雑誌』にしばしば載せられる広告などによると、通称フェリス女学校、公式にはフェリス英和女学校と称しているが、23年9月より、教育勅語の渙発される状況を反映してか、フェリス英和女学校と称するようになっている。他のミッション・スクールがいずれも英和である時、この一校のみが敢えて和英を称した所に、後に述べるその教育姿勢の特質がうかがわれるが、ともあれ以上の事情もあわせて本稿では通称のフェリス女学校を用いることにした。
- (2) 海外、在日の外国宣教師、特にアメリカのキリスト者を対象として、日本の宣教事情、宗教、文化、教育、社会事情などを報告紹介した隔月刊の英文雑誌で、明治26年10月、仙台東北学院宣教師 W. E. ホーイにより創刊、編集され、横浜製紙分社で印刷されていた。賤子は27年6月から29年2月亡くなるまで、その Woman's Department と Children's Department の最初からの主筆として、Mrs. Kashi Iwamoto の名で多数の英文記事を書いた。
- (3) かし子の姓名にはいささか複雑な事情がある。本名は松川甲子（かし）であり、会津藩士松川勝次郎正義の長女として会津若松町に生まれた。維新の動乱期に父が隠密の役目を受けたことから家族も島田姓を名のるようになり、また甲子は生れ年の甲子（きのえね）による。成人してからは志が嘉せられるようにとの祈りをこめた嘉志子なる名前を用いるようになる。数え年7歳（明治3年）の時母に死なれ、横浜の織物商山城屋の番頭大川甚平の養女としてひきとられたことから、フェリス女学校在学時代は大川かしであった。その後養父の他界に伴い、明治18年7月復籍して再び島田姓を称するようになる。22年巖本善治と結婚してからは巖本嘉志子である。ペンネームの若松賤子は、彼女が幼き日の思い出とともに愛した生地若松と、敬虔なキリスト教信仰からでた「主の賤しき僕」の意によるものであることは今更いうまでもない。
- (4) 本稿では賤子に関し広く行なわれている慣例に従って年令はすべて数え年によることとした。
- (5) 明治期のミッション・スクールの教育理念と教育内容については拙稿「E. S. ブースのキリスト教女子教育理念」（『フェリス女学院大学紀要』第10号）でもふれた。
- (6) ミス・メアリー・E・キダーは独身でありながら明治2年維新後の物情騒然たる日本に、米国リフォームド教会外国伝道協会から婦人として最初に派遣され、亡くなるま

での41年間日本にとどまって宣教、教育事業等の初志を果した宣教師で、その創始したフェリス女学院は現存する最も古い女子教育機関である。その創始時期については高谷道男編訳『S. R. ブラウン書簡集』p. 261参照。

- (7) 『女学雑誌』26年6月10日号「子供に付て(二)」参照。
- (8) *The Japan Evangelist*, Woman's Department, "Sketch by the Rev. E. S. Booth", April 1896.
- (9) *The Japan Evangelist*, Children's Department, "Some Girls that I Know", Dec. 1895.
- (10) 『植村正久夫人季野がことども』p. 36. 同書にはこれは15年10月26日の手紙とあるが、ミス・ウィットベック(ミラー夫人休暇帰米中の校長代理、14年晩秋に帰米か?)が近く帰帆することなどが書かれ、また季野は12年4月植村との婚約以来、やっと事情が許されて15年8月ミラー師の司式で結婚しているはずが、署名が「山野内」となり、郷里に帰っているのもおかしいので、他の文面からしても、これは14年の手紙ではないかと思われる。
- (11) この点、ミッション・スクールに学んだことが、生徒を英語に秀でた者にしえても、必ずしも英文学にも優れたものとするとは限らないのであるが、フェリス女学校の場合、創立者キダーをはじめ、他の婦人宣教師、そして第二代校長ブースも多分に文学的理解があり、詩を解する人間味豊かな人々であったようで、かし子らにもシェークスピアやキリスト教的色彩の濃い健全な文学ばかりであるが、授業で教えまた大いに読むことを奨めたようである。かし子も「学校教育は宗教観念に、文学思想にいとも重やかにして他に得られぬ特色ありて……」と述べている。(『女学雑誌』27年4月21日号「主婦となりし女学生の述懐(其二)」) ちなみにキダーは8年6月の開校以来1年間の歩みを記した9年末の報告書の中で過去の発展を神に感謝し、新しい年への期待をうたう喜びに溢れた詩を書いている。巧拙はわからないがここに記してみる。

The past is not so dark as once it seemed,

For there Thy footprints now distinct I see;

And seed in weakness sown, from death redeemed,

Is springing up, and bearing fruit in Thee,

Not all that hath been, Lord, henceforth shall be:

A low, sweet, cheering strain is in mine ear,

Thanksgiving, and the voice of melody,

Are ushering in from Heaven a blest New Year.

(*Manul: Foreign Missions of the Reformed Dutch Church in America*, p. 273.)

またかし子が在学当時フェリス女学校と係わりの深かった奥野昌綱、植村正久らはいずれも歌人、詩人ともいえる人々であり、当時のフェリス女学校がそのような健全な文学的雰囲気の中に置かれていたといえはいい過ぎであろうか。

- (12) 6年12月4日付フェリス宛キダー書簡、及び『キダー書簡集』pp. 58—61参照。
- (13) *Manual*, op. cit., pp. 271—272.
- (14) *ibid.*, pp. 276—277.
- (15) フェリス女学校の教育内容が米国の女学校と比してなんら遜色がなかったことは、15年に来校した Miss M. Leila Winn が16年婦人伝道協会宛の手紙で、I think this school would compare favorably with most of our American schools. と述べていることから明らかである。Chamberlain, *Fifty Years in Foreign Fields*, p. 32.
- (16) *The Mission Gleaner*, Vol. 1—No. 1, June 18, 1883, Kashi Okawa. 同誌は米国リフォームド教会外国婦人伝道協会刊行の、世界各地の宣教事情を伝える隔月刊雑誌で、1883年に創刊され1918年まで刊行された。
- (17) 『フェリス和英女学校60年史』p. 14.
- (18) *Manual*, op. cit., p. 273.
- (19) 『60年史』p. 21.
- (20) 『女流著作解題』（昭和14年、女子学習院）及び『大日本歌書綜覧』によると、小原燕子は筆名「やすらけいこ」といい、加藤千浪の門に学んで和歌文書に優れ、明治12年『明治女用文』を著し、女子のために消息文の知識とその書き方の範を示した。日本橋蠣殻町及び牛込若宮町等に住して子弟を教授した。他に編著『女子消息文範』、歌集『葵の舎集』一卷（明治16年）がある。明治15年10月14日の読売新聞に「国学に名ある中講義小原燕子女史は、先頃より肺病に罹られ種々治療を盡されしが、其効なく昨日の明方死去されました」という記事が載っている。『新聞編成明治編年史』第5巻。
- (21) Beside him with full flowing trousers is our lady teacher who instructs the girls in Japanese & Chinese reading & writing. She is a wonderful scholar for a woman and Mr. Okuno who has known her for twenty years says she has few

equals among the men. She was a priestess and is very full of conceit and superstition but we hope she may exchange these for humility and wisdom. She knows much of our blessed religion and thinks it is good but has not learned that it is priceless. We consider ourselves extremely fortunate in having her with us. She is very ceremonious in her bearing always puts on purple brocade flowing trousers when she enters upon her duties, taking them off and wearing a plain dark suit in the street such as ordinary mortal wears.

- (22) *Manual*, op. cit., pp. 281—282. 当時の試験はミッション、教会関係の有力者（後に試験委員として制度化）に公開されて公平に審査された。
- (23) 『植村正久夫人季野がことども』には明治10年前後にフェリス女学校に在学したと書かれている。推察するに、8年6月—9年6月の間に入学し、10年5月にかし子と共に受洗し、11年には前に記したようにかし子と宗教活動に励み、12年4月植村正久と婚約、15年8月25歳で結婚してやめるまで、20歳前から6、7年間フェリス女学校で研修、教授していたと考えられる。
- (24) 明治10年分の婦人伝道協会宛報告書。
- (25) 15年1月19日付フェリス宛書簡でキダーは次のように書いている。

The first Monday of every month I invite all the former pupils of Ferris Seminary who are scattered about in Tokyo some married and others not, to our house, for a social meeting giving them tea and cake. There are some fifteen or more of these pupils. I would be glad to have this meeting every week but the pupils are so far separated that it is impossible to get them together oftener.

『キダー書簡集』に収録された17年1月22日付手紙にも同じ内容のことが書かれているので (pp. 87—88), この会合はキダーが地方伝道に行くまで少なくとも2年以上続けられたと考えられる。

- (26) I have just received a letter from Kashi Okawa which I enclose. It is simply a private letter to me....She says she looks upon me as her mother and confides to me what she does to no one else. (She was but eight years old when she entered school.) ...last summer vacation she spent with me and was entirely discouraged about the school,...and it required all my persuasion, almost my

authority to make her return to it. She is a noble girl, duty alone led her back to school to do what good she could. (ibid.)

(27) *Manual*, op. cit., p. 273.

The missionaries have steadily kept in view the idea that they were educating the girls, to become good wives and mothers in Japan.

(28) 当時は女子教育が真に制度化されていない時代でもあり、フェリス女学校でも学力に応じて一通りの教育を受けると結婚等の事情で退学してゆくのが通例であったが、ブースによって学科内容も整備され修業年限も定められ、明文化されるにいたった。

(29) これは主に *The Japan Evangelist* に寄せられたかし子の英文を選んで収録したもので、夫巖本善治によって編集され横浜製紙分社より明治29年に公刊された。in Memory of Mrs. Kashi Iwamoto, the First Graduate of Ferris Seminary と題され善治によって「日本のキリスト教女子教育の発展のために」献げられている。また明治36年にはアンナ・C・ハーツホーンの編纂並びに序になる袖珍本『巖本嘉志子英文集』が博文館より出版されている。

(30) 英文集『巖本嘉志子』初版 p. 161.

(31) *The Mission Gleaner*, Vol. 1—No. 5, May 15, 1884, Emilie S. Booth.

(32) ibid.

(33) 『女学雑誌』明治20年4月2日号に「横浜フェリス女学校は更に校舎を増築して生徒250名を容るるに足るものとし尚ほ当今伝道会社に附属するを改めて、自給独立の学校を為さんとて夙に其計画あり去年校長ブース氏米国に帰省ありてよりは彼地に於て専ら其資金の準備に尽力せられたる由……」と記されているが、ブースのこの努力によって22年の大規模な増築が可能となった。

(34) 22年の増築記念式典における Yesterday and Tomorrow の演説は、昨日まではアメリカの友人によって維持されて来た学校が、明日からは日本人の手で運営さるべきことを宣言したものであった。

...on whom rests principally the making of the future of Ferris Seminary? Does it rest on our American friends, who have first planted it, and then watched its growth, with so much prayerful longings? Not by any means. I think they are, in respect to this institution, heroes, who are passing away from the stage to give place to us Japanese to act our part. (英文集『巖本嘉

志子』p. 170.)

- (35) *The Japan Evangelist*, op. cit., "Sketch by the Rev. E. S. Booth".
- (36) 20年の「学校一覧」には特に文学会の項を設け「生徒相謀リテ時習会ト名クル文学研究ノ会ヲ設立シ毎週一回（毎月一回の誤りか？）相会シテ演説或ハ文章ヲ朗読ス是会員ノ交際ヲ親密ニシ学識ヲ練磨スルニ大ニ補益アラシメン為ナリ」とあり、学年暦には10月21日を時習会記念日として休業しているところをみると、これが教育上いかに重要な企画と認められていたか推察できる。21年11月2日の文学会3周年記念会でかし子も、この催しがカリキュラムの中で重要な位置を占めたことを次のように喜んでいる。

It was indeed a surprise to us to find on opening the latest curriculum of "Seminary" that our modest existence was recognized, and that we were given a place in the school calender. (『女学雑誌』23年12月6日号附録)

- (37) 22年の増築により、横浜切っのモダン建築、ヴァン・スカイック・ホールが建てられ、地域の様々な文化的宗教的会合にも広く利用された。
- (38) 『60年史』pp. 62—63.
- (39) 『女学雑誌』の記者は「此の雑誌はもとより刊行さるるならねば惜しき金玉の章を世に現はさで没し玉ふも多かるべきに付き此の後ち其のうちの善きものを乞ふて時々本誌に載することとすべし」と書いているが、その後同誌に掲載された片山なを「教育論」(19. 6. 5) 佐藤てつ「智識は失敗より学ぶ説」(19. 10. 15) 松田みち子「音信の義務」(20. 2. 19) 長谷川峯子「マダム・イリサベスの傳」(21. 1. 21—21. 2. 4) などの文章はこの時習会雑誌からとったものであろう。このようにかし子が早くから生徒たちを社会的舞台に引き出し訓練を施そうとした意味も大きいといえる。
- (40) 善治はこの2日前の16日に記念すべき明治女学校の第一回卒業式を終えたところであり、結婚式には木村熊二や植木枝盛も出席した。青山なお『明治女学校の研究』p. 606。
- (41) 「主婦となりし女学生の述懐(1)(2)(3)」『女学雑誌』27年3月31日, 4月21日, 5月12日号。
- (42) たとえば塩田良平「若松賤子と教化文学」『概観明治文学』昭和13年。
- (43) かし子が家庭の読物に特に関心をもつようになったのは、単に家庭をもち子供をもつようになったからばかりではないようである。フェリス女学校の恩師キダーは明治5

年の手紙の中で「私は日本人に、下品でなく俗悪でもない子供のための娯楽があることを教えたいのです。一般に日本人の娯楽には、子供たちがそのことを知ったらただもう恐るべき事態になりそうに思われるようなものがたくさんあります」(1月19日付、『キダー書簡集』p. 51)と書き、早くから日本の子供達の置かれている状況を憂い、日曜学校の開拓者としても功績があった。そして明治10年 Woman's Union Missionary Society の Miss S. B. Mc Neal が三浦徹の助けによって創刊した家庭向けの月刊小説『喜の音』を、15年からはキダーが編集するようになり、16年には『小さき音』という子供にも読める附録もつけるようになって、当時合わせて1万部以上印刷されていた。(Tokyo Missionary Conference, pp. 448—49.) かし子もこれを読んだであろうし、また夫善治も『小学雑誌』という学童を対象とした啓蒙教育雑誌を明治15年6月10日に創刊している。

- (44) 『女学雑誌』23年4月5日号「閨秀小説家答」。
- (45) 同上。
- (46) 同上。
- (47) 以上、柳田泉「若松しづ子」今井邦子編『日本女流文学評論』昭和23年。
- (48) 『清沢満之全集』6巻, p. 84.
- (49) *The Mission Gleaner*, Vol. 1—No. 5, 1884.
- (50) 青山なお他『女学雑誌諸索引』p. 208.
- (51) 秋枝蕭子「キリスト教系女子教育研究のしおり——明治時代プロテスタント系女学校について——」福岡女子大学文学部『文芸と思想』第25号, 1963.
碓井知鶴子「明治前半期のキリスト教女子教育にみる外国文化摂取の一形態」京都大学教育学部比較教育学研究室『比較教育試論』第3集, 1969.
- (52) *The Japan Evangelist*, op. cit., "Sketch by the Rev. E. S. Booth."
- (53) 『女学雑誌』27年5月12日号の「主婦となりし女学生の述懐(完)」で、「日本流の家」を「君父政体」と呼んでいるのも面白い。
- (54) 塩田良平「若松賤子と教化文学」op. cit. 参照。
- (55) 『女学雑誌』27年5月12日号「主婦となりし女学生の述懐(完)」。
- (56) *The Japan Evangelist*, op. cit., "Sketch by the Rev. E. S. Booth."
- (57) かし子は一度も洋服を着たことがなかったというが、彼女の日本婦人としての完璧さをブースは次のように書いている。

She did not lose her Japanese qualities or instincts in any degree. Her character as a Japanese woman was enlarged, enriched, and broadened, by the knowledge she had gained of the characteristics of her foreign sisters, both of those with whom she came in personal contact and of those whose acquaintance she made by reading. (ibid.)

- (58) ibid.
- (59) *The Japan Evangelist*, ibid., "Other Tributes."
- (60) *The Japan Evangelist*, W. D. 論説 June 1894.
- (61) ibid.
- (62) ibid.
- (63) *The Japan Evangelist*, C. D., Oct. 1894.
- (64) ibid., W. D., June 1895.
- (65) ibid., W. D. 論説 Dec. 1895.
- (66) ibid., W. D. 論説 Feb. 1895.
- (67) ibid., W. D., Aug. 1895.
- (68) ibid., C. D., Dec. 1895.
- (69) op. cit., "The Condition of Woman in Japan"
- (70) 『女学雑誌』27年10月6日号「雑誌月刊に改むるの辞」。
- (71) *The Japan Evangelist*, C. D., Oct. 1894.
- (72) 『女学雑誌』27年6月2日号。
- (73) 『同誌』, 29年2月25日号, かし子辞世の言葉。

参 考 文 献

- 『女学雑誌』明治18—37年。
- 青山なお他『女学雑誌諸索引』昭和45年, 慶応通信。
- The Japan Evangelist*, June 1894—April 1896.
- 『キダー女史伝道局宛公式書簡』(英文, フェリス女学院資料室蔵)。
- フェリス女学院資料整備委員会編訳『キダー書簡集』1975年, 教文館。
- Manual: Foreign Missions of the Reformed Dutch Church in America*, 1877.
- Chamberlain, *Fifty years in Foreign Fields, China, India, Japan, Arabia*.

- Tokyo Missionary Conference Report.*
The Mission Gleaner, 1883—1884.
佐波亘編『植村正久と其の時代』昭和12, 教文館。
同上『植村正久夫人季野がことども』昭和18, 同上。
『明治文化全集』10, 教育編, 昭和3, 日本評論社。
黒田惟信編『奥野昌綱先生略伝並歌集』昭和11。
高谷道男編訳『S. R. ブラウン書簡集』1965, 日本基督教団出版部。
『フェリス和英女学校60年史』昭和6。
『フェリス女学院100年史』1970。
「布恵利須英和女学校一覧」(明治20—21)。
「母校略史」(フェリス女学校同窓会雑誌『白菊』3, 明治42)。
英文集『巖本嘉志子』明治29, 横浜製紙分社。
桜井鷗村編, 若松賤子遺稿『忘れかたみ』明治36。
同上『小公子』明治30。
『小公子』昭和2, 岩波書店。
小玉晃一「若松賤子」(吉田精一編『日本女流文学史』近世近代篇, 昭和50, 同文書院)。
柳田泉「若松しづ子」(今井邦子編『日本女流文学評論』昭和23, 明日香書房)。
塩田良平「若松賤子と教化文学」(『概観明治文学』昭和12, 人文書院)。
鈴木二三雄「若松賤子と『女学雑誌』1, 2」(『フェリス論叢』昭和35, 36)。
中村忠行「若松賤子と英米文学」(『近代文芸の研究』昭和31, 北星堂)。
昭和女子大近代文学研究会編『近代文学研究叢書』2, 昭和31)。
相馬黒光『明治初期の三女性』昭和15, 厚生閣。
『現代日本文学体系』5, 昭和47, 筑摩書房。
『日本現代文学全集』10, 昭和37, 講談社。
柳田泉「女性作家七人語」(『伝記』2の2, 昭和10)。
磯崎嘉治編『巖本善治——女学雑誌派連環』1974, 共栄社。
『古川佐寿馬遺稿集』昭和46。
青山なお『明治女学校の研究』昭和45, 慶応通信。
若松賤子・刊行委員会編『若松賤子——不滅の生涯』1977, 共栄社。
巖本善治「撫象座談」(『明日香』昭和11・12, 古今書院)。

碓井知鶴子「明治前半期のキリスト教女子教育にみる外国文化摂取の一形態」(京都大学『比較教育試論』第3集, 1969・4)。

同上「明治期のキリスト教女子教育の定着過程」(『東海学園女子短大紀要』6号, 昭和44・8)。

秋枝蕭子「キリスト教女子教育研究のしおり」(福岡女子大『文芸と思想』25号, 1963)。
雑誌『太陽』2巻4号—2巻6号, 明治29. 2. 20—3. 20, 博文館。